

「家事」はどのようにとらえられてきたか？
— 「公共／家内領域の分離」という社会認識との関連から —

大 和 礼 子

How the Concept of Housework Has Developed in Sociological
Studies — with reference to the image of society as separate
spheres between the public and the private

Reiko YAMATO

Abstract

The purpose of this paper is to critically examine two widely accepted concepts: housework as “unpaid reproductive labor performed by women for her family within the household”, on the one hand, and modern society as “separated between the public and private spheres”, on the other. Firstly, it is shown that how the accepted concept of housework has developed, and has been deeply affected by the image of society consisting of the two separate spheres. Secondly, it is revealed using historical and contemporary studies that the orthodox concept of housework can not capture people’s varied experiences of housework, and that the boundary between the public and the private is being socially constructed, and consequently always shifting and ambiguous. And finally, new frameworks are presented for understanding varied cases of housework, on the one hand, and the relationship between the so-called “public” and “private”, on the other.

Key words : housework, the public sphere, the private sphere, domestic servant

抄 録

本稿の目的は、第1に、今日広く用いられている家事概念、つまり「家内領域において、家族のために、女性が行なう無償の、労働力再生産のための労働」を批判的に検討し、その限界を示し、これに代わる家事をとらえるための視点を提案することである。第2に、近代社会科学において暗黙の前提となっている「公共領域と家内領域の分離」という社会認識についても、同様のことを行なう。これらの目的のために、まず、「家事は労働ではない」と考えられていた段階から、どのような段階をたどって、「家内領域において、家族のために、女性が行なう無償の、労働力再生産のための労働」という家事概念が形成されてきたのかを見る。そしてこの家事概念が、「公共領域と家内領域の分離」を自明視する、近代社会科学の社会認識のあり方と密接に関わってきたことを示す。次に、この家事概念によってはとらえられない家事が、実際には多く存在すること、また公共領域（とされるもの）と家内領域（とされるもの）の境界は、その本質として、様々な社会的行為者による社会的構築の過程にある流動的なものであることを、歴史的な事例を中心に示す。最後に、家事を実証的に把握・分析するための視点、および公共領域（とされるもの）と家内領域（とされるもの）の関連をとらえるための視点を提案する。

キーワード：家事、公共領域、家内領域、家事使用人

目次

1. 問題の所在
 - (1-1) 社会科学における「公共領域と家内領域の分離」
 - (1-2) 「女性=依存、男性=独立」か？
 - (1-3) 「家事」のとらえ方における4つの段階
2. 第1段階——家事は「労働」ではない
 - (2-1) マルクスの枠組みにおける「家事」
 - (2-2) エンゲルスの枠組みにおける「家事」
 - (2-3) パーソンの枠組みにおける「家事」
 - (2-4) 家事分担の実証的研究——ブラッドとウルフの研究を例にして
 - (2-5) 第1段階のまとめ
3. 第2段階——家事は「労働」だ！
 - (3-1) 「家事労働論争」における「家事」
 - (3-2) アン・オークレーによる家事の研究
 - (3-3) 新家庭経済学における家事
 - (3-4) 第2段階のまとめ——労働としての家事
4. 第3段階——なぜ女性が家事をするのか？
 - (4-1) ハートマンの二重システム論
 - (4-2) チョドロウによる女性のアイデンティティとケア役割の関連
 - (4-3) 「愛の労働」としての家事
 - (4-4) 世帯効用の最大化とジェンダー・ディスプレイの最適化の関数としての家事
 - (4-5) 第3段階のまとめ——家事における物質的側面と心理的側面
5. 第4段階——「公共／家内領域の分離」を越えて
 - (5-1) 第1の批判——「家事使用人」の存在
 - (5-2) 労働者階級やエスニック・マイノリティの女性にとっての「家事」
 - (5-3) 白人中産階級女性中心の「家事」概念に対する異議申し立て
 - (5-4) 第1の批判の要約
 - (5-6) 第2の批判——社会的に構成されるものとしての「公共／家内領域の分離」
 - (5-7) 「公共／家内領域の分離」の実態
 - (5-8) イデオロギとしての影響——女性労働の過小評価、男性労働の過大評価
 - (5-9) 第2の批判の要約
6. 結論——家事を見るための視点

1. 問題の所在

本論文の目的は、第1に、おもに社会学において、第2波フェミニズムの登場するより前から今日に至るまで、「家事」がどうとらえられてきたかを、4つの段階に区切って見ていくことである。4つの段階とは、表に示したように、第1段階（第2波フェミニズムの登場する前で、社会理論において家事は「労働」とは考えられなかった段階）、第2段階（第2波フェミニズムの登場により、家事が「労働」と認識され始めた段階）、第3段階

家事はどのようにとらえられてきたか？—「公共／家内領域の分離」という社会認識との関連から（大和）

（「家事をすることはすべての女性にとって普遍的な経験である」と暗黙のうちに前提し、その上で、「なぜ家事が女性の労働であるか」を説明しようとした段階）、第4段階（家事をすることとはすべての女性にとって普遍的な経験ではなく、階層やエスニシティにより家事をしなければならない女性とそれから免除されている女性に分かれるということ視野に入れ、家事の意味をとらえようとした段階）である。これらの段階は、それぞれの研究が行なわれた時間的順序にしたがったものというよりは、家事の見方がどのように発展していったかという論理的順序にしたがったものである。また本論文では、これらの段階におけるすべての研究を網羅するのではなく、それぞれの段階を新たに切り開くような理論的貢献のあった研究を中心に取り上げる。

表

家事をとらえる枠組	問題点
<p>【第1段階】 家事は「労働」ではない</p> <p>「公共領域＝生産・労働＝男性、 家内領域＝非生産・非労働＝女性」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・家事を「生産・労働」とはとらえなかった。 ・「公共／家内領域の分離」を自明視・自然視した。
<p>【第2段階】 家事は「労働」である</p> <p>「公共領域＝職業（市場）労働＝男性、 家内領域＝家事（非市場）労働＝女性」。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「女性が家事をする」を暗黙の前提にした上で、「家事は労働か否か」を論じた。そのため「そもそもなぜ、男性ではなく女性が家事をするのか？」は問われなかった。 ・「公共／家内領域の分離」を自明視・自然視した。
<p>【第3段階】 なぜ女性が家事をするのか？</p> <p>「なぜ男性ではなく女性が、家事をするのか？」を、様々な立場から説明する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「家内領域で家事を行うことは、すべての女性に共通の経験である」と暗黙のうちに前提した。そのため女性の多様性をとらえることができなかった。 ・「公共／家内領域の分離」を自明視・自然視した。
<p>【第4段階】 「公共／家内領域の分離」の見直し</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家事は、様々な領域において、様々な社会関係のもとで、様々な報酬を伴って（あるいは無報酬で）行なわれる。 ・家事に対する男・女の経験は、階級やエスニシティなどによって異なる。 ・公共／家内領域の境界は、流動的な社会的構造物である。 	

本論文の第2の目的は、「家事」をどのようにとらえるかは、「公共領域／家内領域の分離」という社会認識と深く関連しており、したがって「家事」概念の発展、特に第4段階における発展は、「公共／家内領域の分離」という近代の社会科学が自明の前提としてきた社

会認識自体の見直しを迫るものであることを示すことである。

そして第3に、これらの研究を経た現時点において、「家内領域において、家族のために、女性が行なう無償の、労働力再生産のための労働」という家事概念を脱構築し、家事を見るための新たな視点を提案することである。

本論文において「家事」とは、人々の生存・健康・快適さを維持するために行われる料理、掃除、洗濯などの活動を意味する。幼児、高齢者、障害のある人など、これらを自分できない人々に対するケアも含まれる。

本論文の構成は、まず、「公共／家内領域の分離」という社会認識が、家事の概念化にどのように関連しているのかについてその概略を示す（第1章）。次に、第1～第4段階における家事の研究を、「公共／家内領域の分離」という社会認識との関連で見えていく（第2～5章）。そして最後に、家事を見るための視点を提案する（第6章）。

（1-1）社会科学における「公共領域と家内領域の分離」

近代以降の社会科学は、「公共領域と家内領域という分離した2つの領域」という社会認識を暗黙の前提にしてきた。この社会認識によれば公共領域は、生産、労働、政治、金銭的取引といった活動が行なわれる領域であり、そこでは競争や利己主義が支配的な原理となる。公共領域は、「自然」が支配する領域ではなく、人間がつくりあげる「社会」である。そして公共領域は、西欧近代の思想においては、男性にふさわしい領域であるとされてきた。それに対して家内領域は、性、生殖、養育、消費、休息といった活動（これらは非生産、非労働として位置づけられる）が行なわれる領域であり、そこでは愛や利他主義が支配的な原理となる。家内領域は、人工的な「社会」である公共領域とは異なり、より「自然」に近く、しかも女性にふさわしい領域とされてきた（Davidoff, 1995）（McDowell and Pringle, 1992b）。つまり、「公共領域＝生産・労働＝男性、家内領域＝非生産・非労働＝女性」というイデオロギーのもとに、近代社会の研究が行われてきたのである。

たしかに、近代産業社会の進展に伴って、公共領域と家内領域の分離という方向へ社会が変化してきたことは否めない。しかしながら、後に第5章で詳しく見るとおり、実態としてこのような分離が多く見られたのは、男性の収入が十分にあり、女性が家庭外で就労する必要がなかった階層においてであり、社会のすべての層がこのようなライフスタイルをとることができたわけではない。にも関わらず、公共領域と家内領域の分離という観念は支配的イデオロギーとして、すべての女性と男性に影響を与えた。たとえば法律や社会

制度はこの支配的イデオロギーに沿う形で作られた。そのため女性は、高等教育、上級の専門職や管理職、公的政治など公共領域の活動と考えられるものから、長い間合法的に排除されつづけた（McDowell and Pringle, 1992a）。また男性に対しては、自分1人の収入で妻や子どもを養っていくことが、一人前の男性、一人前の市民の条件とされ、それができないと目された男性は、市民権から排除され続けた。そして、このイデオロギーの影響や、このイデオロギー（男性稼得者型家族モデル）に基づいた社会制度は今日に至るまで続いている。

この「公共領域＝生産・労働＝男性、家内領域＝非生産・非労働＝女性」という社会認識に根本的な疑問が突きつけられるようになったのは、1960年代に第2派フェミニズムが起ってから後のことである。それより前の社会科学的研究は、このような社会認識を自明の前提にして行なわれてきた。そのため、公共領域と家内領域の分離は「あたりまえのこと」と見なされ、両者は別々に研究される傾向にあった。しかも社会科学にとって、人間がつくる「社会」であるところの公共領域を研究する方が、家内領域のそれより重要であり、研究対象としての地位が高いと考えられてきた。したがって社会学の古典的研究もその関心をおもに公共領域に向けており、一方、家内領域は「自然なもの」と見なされ、深く探求されることは少なかった（Grint, 1997 [1992]）（Stacy, 1981）。

たとえばデュルケーム（Durkheim, Émile）は、近代社会における分業（有機的分業）に深い関心を寄せ、有機的分業こそが個人的人格の尊厳と社会的連帯の両方を可能にすると論じたが（Durkheim, 1960 [1893] = 1971）、彼のいう有機的分業とは、公共領域における職業的分業のことを意味していた。彼は、家内領域における「男は職業、女は家庭責任」という分業の進展も、有機的分業の一例と見なしていたが、なぜそのような分業が進んだのかについては、文明が進化するとともに男女の分業が進む（そしてそれは、脳をはじめとする身体の発達度における男女の違いを生むので、未開民族の男女の身体は比較的似かよっているが、欧米人のそれは男女で大きく異なる）という自然進化論的な説明を行なっているのみである。したがってデュルケームは、家事についてそれ以上の社会学的探求を行なっていない。ウェーバー（Weber, Max）は、近代社会における合法的支配の進展について論じている（Weber, 1967 [1947]）。しかし、これは公共領域についてのみあてはまるのであり、女性はそもそも公共領域へのアクセスが許されなかったことや、家内領域において女性は、伝統的支配とも呼びうる夫の恣意的な支配に服していたことについては、特別な注意を払っていない（Stacy, 1981）。またウェーバーは、人々の労働に対する態度において合理化が進展したことを論じた（Weber, 1920=1989）。しかし彼にとっての労働

とは職業（市場）労働であった。19世紀において、職業（市場）労働に対しては合理性を追究した産業資本家（ブルジョアジー）たちが、家庭における家事に対しては「家内性崇拜」（第5章を参照）に基づき、その情緒性・属人性・神秘性などを追求したため、家事の合理化はなかなか進まなかったといったことは、彼の関心の範囲外であった（Davidoff, 1995 [1976] b）。

（1-2）「女性＝依存、男性＝独立」か？

このように、「公共領域＝生産・労働＝男性、家内領域＝非生産・非労働＝女性」という認識が社会科学における暗黙の前提とされたことは、家事をどのようにとらえるかに対して深刻な影響を及ぼした。第2波フェミニズムが登場するより前（第1段階）においては、この「公共領域＝生産・労働＝男性、家内領域＝非生産・非労働＝女性」という認識枠組みの圧倒的な影響のもと、家事は生産的活動や労働であるとは考えられなかった。その結果、家庭内で家事を行なう女性に対して与えられた制度的なラベルは「被扶養者」、すなわち扶養者である男性に扶養・保護される存在というものである。このラベリングは矛盾に満ちたものであり、女性を、家事をすることによって夫や子どもの生活維持に貢献すると見なすが、それにも関わらず、夫が妻に依存しているとは見なさず、逆に妻がもっぱら夫に依存し扶養されていると見なす。すなわち、「公共領域＝生産・労働＝男性、家内領域＝非生産・非労働＝女性」という認識枠組みは、一方で、女性が「家事によって成人男性を支えていること」を不可視化することにより女性に依存者というラベルを与え、もう一方で男性が「女性の家事に依存していること」を不可視化することにより男性の自立性という虚構をつくりあげたのである。

（1-3）「家事」のとらえ方における4つの段階（表を参照）

第2波フェミニズムの登場より前（第1段階）の状況については、上に述べたとおりである。第2波フェミニズムの登場に伴い、家事を労働と見なす認識枠組みがはじめて登場する（第2段階）。しかし、この第2段階においては、「家事は女性の労働であること」を自明視しており、その上で、「家事は労働か否か」が論じられた。したがって、「そもそもなぜ、男性ではなく女性が家事をするのか？」というフェミニスト的な問いは問われなかった。同時にこの段階においては、「社会は公共／家内領域に分離している」「家事は家内領域で行なわれている」という認識も暗黙の前提として存在していた。

次の第3段階においては、前の第2段階で問われなかった問い、つまり「なぜ男性では

家事はどのようにとらえられてきたか?—「公共／家内領域の分離」という社会認識との関連から (大和)

なく女性が、家事をするのか?」を中心に据えて、生物学的運命に帰さない方法で、それに答えようとする研究がなされた。しかし、前の段階と同様にこの段階においても、「社会は公共／家内領域に分離している」「家事は家内領域で行なわれている」という社会認識は暗黙の前提とされ、この認識自体に疑問がさしはさまれることはなかった。

この第2、第3段階の研究を通じて、「家内領域において、家族のために、女性が行う無償の、労働力再生産のための労働」という家事概念が、社会科学の研究者の間に広まっていった。

最後に第4段階においては、上の家事概念の基礎になっている「社会は公共／家内領域に分離している」「家事は家内領域で行なわれている」という社会認識に対して、疑問が提示された。まず、そもそも「公共／家内領域の分離」は歴史的・社会的構成物であり、両領域の境界は常に曖昧で流動的で、その定義をめぐる様々な社会的行為者が争っているということが示された。したがって、どの社会階層、どのエスニック・グループ、どのジェンダーにも普遍的にあてはまる公共／家内領域の固定的な境界が存在するわけではないことが明らかにされた。そしてそうだとするならば、家事が家内領域で行なわれるとは限らないことになる。さらに、すべての女性が家事を行なうとは限らず、時代や社会によっては、同じ女性の中で、家事をする人とそのサービスを楽しむ人の分離が存在することが示された。そして、そのような女性の中での分業に目を向け、それと全体社会の構造との関連を問うような視点を持つ必要があることが主張された。

以下では、第1～4の各段階で家事はどのように概念化されてきたのか、その概念化は「公共／家内領域の分離」という社会認識や、男女の自立や依存に関する観念とどう関連していたのかについて、順を追って、具体的に見ていこう。

2. 第1段階——家事は「労働」ではない

先に見たように、デュルケームやウェバーといった社会学の創始者たちは、家内領域についての社会学的探求をほとんど行っていない。それに対してエンゲルス (Engels, Friedrich) は、例外的に、家内領域や家族について、社会学的な探求を行った (Craig, 1997) (Grint, 1997 [1992]) (Stacy, 1981)。しかも彼は、マルクス (Marx, Karl) の社会理論の枠組にしたがってそれを行った。そこでこの章ではまず、マルクスとエンゲルスの枠組みにおいて家事はどう位置づけられるのかについて見ていくことにする。次に、マルクス主義と並ぶもう1つの社会学理論の系譜である構造機能主義における家事の扱いを、パ

ーソンス (Parsons, Talcott) の理論と、ブラッド (Blood, Robert O. Jr.) とウルフ (Wolfe, Donald M.) の実証研究によって見ていく。そして、第2波フェミニズムが登場する前のこれらの研究はいずれも、「公共領域=生産・労働=男性=自立、家内領域=非生産・非労働=女性=依存」という認識枠組みに従って家事をとらえており、家事を労働ととらえる視点はなかったことを示す。

(2-1) マルクスの枠組みにおける「家事」

マルクス (Marx, Karl) の労働についての考え方 (Marx and Engels, 1962=1982) を、Grint (1997 [1992]) やTong (1995 [1989]) の理解にしたがって見ていこう。マルクスは、啓蒙主義の伝統に連なる、合理的に思考する能力 (rationality) が人間の本質だとする考え方に対して、自然に働きかけ自らの生存のための手段を自らが作り出す能力、すなわち労働が、他の動物と人間を分かち本質であると考ええる。しかしながら、資本主義的生産様式 (労働者が自らの労働力を商品として売り、生産手段を所有する資本家が賃金と引き換えにその労働力を買い、商品を生産する) のもとでは、人間の本質である労働の場において、労働者は搾取される。マルクスは、商品の価値はその生産のために投下された労働量により決まると考えている。したがって労働力という商品の値段つまり賃金は、労働力 (子どもや妻など家族のそれを含む) を維持・再生産するのに必要な費用であり、それは、そのために購入しなければならない食料や衣料など生活必需品の値段と等しい (つまり、賃金=労働力再生産のための費用=生活必需品の値段)。しかしマルクスは、労働力、つまり労働の潜在的な形態 (Grint, 1997 [1992]) は、一般の商品とは異なり、いったん資本家に購入され生産過程に投入されると、労働として顕在化し、支払われた賃金以上の価値を生み出すと考える。この労働が生み出した価値から、賃金を引いた残りは、剰余価値となり (つまり、〈労働により生産された価値〉 - 〈賃金=生活必需品の値段〉 = 〈剰余価値〉)、資本家の取り分となる。すなわちこのシステムのもとでは、労働者は、1日の就業時間のうち何時間かは自分の賃金のために生産を行ない、残りの何時間かは資本家の剰余価値のために生産を行なう。このように、剰余価値が生み出される (そして、資本家によって搾取が行なわれる) のは、賃金と労働力の交換の場 (労働市場) ではなく、生産の場 (労働過程) においてである。搾取が見えにくいのは、賃金が一見、「労働の対価 (すなわち労働が生産した価値の対価)」として支払われているように見せかけられているが、実は労働価値説に従い、「労働力維持のための費用」として支払われているからであるとマルクスは考えている (Grint, 1997 [1992]) (Tong, 1995 [1989])。

家事はどのようにとらえられてきたか？—「公共／家内領域の分離」という社会認識との関連から（大和）

このようにマルクスの枠組みにおいては、労働や生産が非常に重要な意味を持つ。なぜならこれらは、人間の^{本質}であると同時に、^{搾取}を生み、それによって階級関係を再生産する場だからである。さらに人々の持つ意識も、教育などの啓蒙によってではなく、生産においてどのような位置をしめるか（労働力を提供する側なのか、あるいは生産手段を所有しそれを提供する側なのか）によって決定されると考えられている。このようなマルクスの分析に見られる「生産中心主義」（生産の場における経済的搾取を不平等の要因として最重要視したこと）や、「階級中心主義」（階級関係以外の要因——たとえばジェンダーやエスニシティ——によって生じる不平等の分析を軽視したこと）（Grint, 1997 [1992]: 95）は、マルクスが家族や家事をどのように位置づけたのかに影響を与えている。

そこで次に、マルクスの枠組みにおいて家内領域や家事はどのようなものとして扱われているかについて見よう。マルクスの枠組みにおいて家内領域は、資本主義に不可欠な労働力を再生産するための場である。その再生産は、商品として購入された生活資料の消費によって行われる。しかしビーチイ（Beechey, Veronica）をはじめとするフェミニストが指摘しているようにマルクスは、商品として購入された生活資料が実際に消費されるためには、料理をする、洗濯をするといった家事が必要であることを考慮していない。マルクスのいうように、生活資料の値段としての賃金が支払われるだけで、一方で剰余価値が生まれ他方で労働力が再生産され続ける（したがって資本主義的生産が行われ続ける）ためには、「家事が無償で行われること」が必要不可欠の条件である。しかしマルクスは、家事が無償で行われ続けるために資本主義社会（資本家）がどのような仕組みを用意したのかといった問いを社会科学の問いとして立てることをあまり重視していないように思われる（Beechey, 1987 = 1993）。マルクスは次のように述べている。

「労働者階級の不断の維持と再生産も、やはり資本の再生産のための恒常的な条件である。資本家はこの条件の充足を安んじて労働者階級の自己維持本能と生殖本能とに任せておくことができる。」（Marx and Engels, 1962 = 1982: 745）

このようにマルクスが、（少なくとも社会科学の分析としては、）労働力の再生産における家事の役割を重視せず、また再生産は本能の問題と考えたその根底には、「公共領域 = 生産・労働 = 男性、家内領域 = 非生産・非労働 = 女性」「公共領域 = 社会、家内領域 = 自然」という社会認識の枠組みがあると思われる。

(2-2) エンゲルスの枠組みにおける「家事」

エンゲルス (Engels, Friedrich) は、マルクスの思想に影響を受けながらもマルクスとは異なり、家族を中心的なテーマに据えて考察している。エンゲルス (Engels, 1985 = 1965) によると、人類の家族は社会の物質的生産の状況が変化するに応じて、異なる形をとってきた。まず、人類史の最初期においては「集団婚」、すなわちインセスト・タブーがまったくなく、すべての男がすべての女の（あるいはすべての女がすべての男の）性的対象となりうるという結婚制度が支配的であった。やがて、最初は異なる世代（たとえば親子）に属する男女が、結婚の対象から忌避され、次に同世代における兄弟-姉妹関係にある男女が、同じく結婚相手として忌避されるという現象が生じる（その理由としてエンゲルスは、近親婚から生まれる子孫は自然淘汰において不利であるという、モーガン (Lewis Henry Morgan) の説を引用している）。その結果、結婚が可能な人々の範囲は縮小し、事実上、集団婚は不可能になる。ここにおいて次の段階である「待遇婚」（すなわち、夫婦の結びつきが緩やかで、しばしば配偶者が変わるような夫婦関係）に移行する。集団婚や待遇婚の段階においては、女性は生産に重要な貢献を行っており、したがって女性の地位は高く、また父子関係より母子関係の方がその生物学的つながりは明らかなので、相続は母系の線に従い母から娘へと行なわれていた。しかし次の段階として、牧畜や農耕が始まると、そこから多くの富が生じ、蓄積され、次の世代に相続させる必要が出てきた。牧畜や農耕は男性の仕事であったので（エンゲルスはなぜそうなのかは述べていない）、女性の仕事の相対的重要性は下がり、それに伴って女性の地位も下がった。女性は男性の労働に依存し、男性に従属するようになった。また富の相続について、男性は自分の息子に相続させることを望んだため、相続は父系制に徐々に移行していった。さらに父系相続においては、妻の産んだ子がその夫の生物学的子孫であることを確実にするために、女性に対する単婚の規制はより強まり、「単婚家族」に移っていった。エンゲルスはこれを「女性の世界史的な敗北」（訳書 p.75）と呼んでいる。近代におけるブルジョワジーの結婚も、この「女性の敗北」の延長線上にある。このようにエンゲルスは、私有財産のあるブルジョワジーの結婚を、男性による女性の性と生殖の支配、一方女性にとっては自分の生存の手段として、自分の性と生殖を男性に譲り渡すものと見ている。一方労働者階級においては、夫による支配の基盤である私有財産はなく、また妻も生産に参加しているために夫の経済力に依存する必要がない。したがって労働者階級の結婚はより平等主義的で、愛情に基づくものであるとエンゲルスは見ている。

エンゲルスの理論は、様々な研究者から様々な批判を受けている¹⁾。しかし、家族は歴

家事はどのようにとらえられてきたか？—「公共／家内領域の分離」という社会認識との関連から（大和）

史的な産物であり、そのあり方は社会状況（特に物質的生産の状況）によって異なるという見方を示した点、また、次に見る構造機能主義者たちとは異なり、男性のみが市場労働を行う近代単婚家族の夫婦関係は支配・被支配関係であるという視点を示したことは、評価すべきであろう。しかし家事の位置づけに関する限り、エンゲルスは家事に重要な位置を与えていない。夫婦関係の不平等を引き起こす要因としてエンゲルスが重要な位置を与えているのは、男性による女性の性と生殖の支配（つまり、これらは父系相続維持のために重要な貢献をしているがその成果は男性に帰属する）と、女性の市場労働からの排除である。女性の家事による貢献にはあまり注意を払わず、女性の家事が、男性（あるいは一家）の生存、生活水準の上昇、私有財産の保持と増殖、社会的威信の向上などにどのように貢献しているのか、つまり男性が、女性の家事にどのように依存しているのかといった視点は、エンゲルスの分析にはない。したがってエンゲルスの枠組みにおいては、家内領域に位置しているブルジョワジーの女性は、性と生殖によって男性に貢献するが、自己の経済的生存においては男性に全面的に依存するしかない存在としてとらえられている。一方、市場労働を行っている労働者階級の女性と、労働者・ブルジョア両階級の男性は、自立した存在（すくなくとも経済的側面においては）としてとらえられている。つまり、人々の自立／依存を分けるのは、市場労働をしているか／いないか、だと考えられており、家事が何らかの有用な生産を行っており、人々はそれに依存しているといった視点はない。このことからエンゲルスの家族の分析も、「公共領域＝生産・労働＝自立、家内領域＝非生産・非労働＝依存」という社会観を暗黙の前提にして行なわれているといえる。

（2-3）パーソンズの枠組みにおける「家事」

次に、構造機能主義の社会学において家事はどのようにとらえられていたのかを見てみよう。その代表として、まずパーソンズ（Parsons, Talcott）の理論を取りあげる。パーソンズは、理論的にも政治的にも、マルクスやエンゲルスとは対立する立場に位置づけられる。しかし家族の見方に関しては、マルクス、エンゲルスと同様に、「公共領域＝生産・労働＝男性＝自立、家内領域＝非生産・非労働＝女性＝依存」という認識枠組みに従ってそれを見ていた²⁾。

パーソンズによれば、近代化・産業化にともない社会構造は単純なものから複雑なものへと分化する。その結果として親族以外の様々な社会組織が重要性を帯び（その中でも最も重要な組織は、パーソンズによれば、職業組織である）、かつて親族組織が果たしていた機能は、それら新たに発展してきた組織に吸収される。このようにして親族の重要性は

低下するが、唯一、核家族は、パーソナリティのための機能をより専門的に果たす存在として、産業社会においても重要性を保っている。パーソナリティのための機能とは、子どもの社会化と成人の精神的安定の機能である。パーソナリティの機能を果たすためには、小規模で親密な核家族が最も適しているとパーソンズは論じている (Parsons, 1956 = 1981)。

さらにパーソンズは、核家族内における夫と妻の役割分化について、次のように論じている。一般に集団は、特定の共同目標の達成を目指して人々の活動を調整・制御するため、その内部で役割を分化させる。小集団においては、集団の課題を達成するための専門家と、社会・情動的問題を解決するための専門家への役割分化が見られる (Bales and Slater, 1955 = 1981)。パーソンズはこの知見を核家族にも当てはめ、近代産業社会の核家族においては、夫=道具的リーダー、妻=表出的リーダー、あるいは、男は仕事に出かけ経済的な面を支え、女は家にいて情緒的な面を支えるというように、内部の構造を分化させると論じている。そしてこのような男女の役割の違いは、男女の生物学的差に由来するとパーソンズは考えている (Parsons, 1956 = 1981)。

このように性別役割が分化した核家族は、産業社会に適合的である。先に述べたように産業社会においては、職業組織と家族はともに重要な機能を果たしているため、両者は共存する必要がある。職業組織を中心とする産業社会に適応するために、家族はかつてのような規模の大きい親族組織から、他の親族から構造的に孤立した核家族へと変容した。このことによって、移動が容易になる。さらに、この核家族の中で職業組織にも所属するのは夫=父のみである。このことによって、業績主義を中心とする職業組織の価値体系と、属性主義を中心とする家族のそれが、夫ひとりを除いては、隔離された上で共存することができるからである (Parsons, 1954 [1949])。

以上がパーソンズの、近代産業社会における家族についての考えである。ここから明らかかなようにパーソンズは、家族の役割構造をとらえるために、職業組織や地域社会との関係で行なわれる「道具的」役割と、おもに家庭内で行なわれる「表出的」役割という二分法を用いた。この二分法に従い、家庭内で行なわれる役割を「表出的」と概念化したことによって、家庭内で行なわれる活動の精神的・情緒的側面が強調され、その結果、家事にはむしろ道具的といった方がよい面が多くあることがとらえにくくなった。すなわちパーソンズが道具的 (= 経済 = 男性) / 表出的 (= 情緒 = 女性) という分析概念を用いたことによって、家事を労働として概念化することが難しくなったのである (Berk, 1985) (Oakley, 1974 = 1993)。これに加えて、パーソンズが家族の機能を、「子どもの社会化と、

家事はどのようにとらえられてきたか？—「公共／家内領域の分離」という社会認識との関連から（大和）

成人の情緒的安定」として定式化したことにより、成人に対して家庭内で行なわれていることは、もっぱら情緒的なことであるという印象を人々に与えることになった。この定式化により、妻が夫に対して行なっている、食事・洗濯・身の回りの世話といった、単なる情緒的サポートとはいえない活動が不可視化される。そしてその結果として、家庭における男性の自立性（情緒以外の面での）というイメージが強化された。

つまり、「道具的／表出的」「子どもの社会化と成人の情緒的安定」といったよく知られるパーソンズの定式化は、家事という労働の存在とその面での女性の貢献、およびそれに対する男性の依存を見えにくくする働きがあるのである。そして家庭内で行なわれる活動として、その表出的要素を突出して強調するこの定式化は、「公共領域＝生産・労働＝男性＝独立、家内領域＝非生産・非労働＝女性＝依存」という近代社会科学の社会認識によく対応している³⁾。

以上述べた点において、パーソンズの家族や家事についての認識は、マルクスやエンゲルスのそれとよく一致している。ただしパーソンズの家族論が、マルクス、エンゲルスの家族論、特にエンゲルスのそれと異なる点は、エンゲルスが性別役割分業に基づくブルジョアの夫婦関係を、夫と妻の支配・被支配関係として本質的に矛盾と葛藤をはらんだものととらえていたのに対して、パーソンズにはそのような視点はなく、性別役割分業に基づく夫と妻の関係は、相互に相補的で調和のもとにあると考えていたということである。

（2-4）家事分担の実証的研究—ブラッドとウルフの研究を例にして

1960年代以降のアメリカにおいて、家事に関連する実証的研究が多く行なわれた。ブラッド（Blood, Robert O. Jr.）とウルフ（Wolfe, Donald M.）の夫婦関係についての研究（Blood and Wolfe, 1960）は、これらの研究に対して範例を示した研究の1つといえるだろう。ブラッドとウルフの研究は、たしかに家事の実証分析を行なっている。しかし、この研究が明らかにしようとしたのは、家事の「労働」としての側面ではなく、むしろ家事の分担が反映している「夫婦関係」なのである（Berk, 1985）。以下でこのことを示そう。

まず、ブラッドとウルフの研究の概略を示そう。彼らの研究は、はっきり明示しているわけではないが、「構造と機能」「道具的役割」などの概念をその主要な分析枠組みとして使っていることからわかるように、パーソンズの枠組みを引き継いでいる。彼らは、「アメリカの家族は崩壊しつつあるのか、あるいは新しい社会環境に適応しつつあるのか」というパーソンズ（Parsons, 1956=1981）と同じ問いに答えることをこの研究の目的に据えている。この問いに答えるために夫婦関係に注目し、まず夫婦関係の構造を検討する。夫

婦関係の構造は、第1に意思決定において夫婦のどちらが支配的か、第2に世帯における仕事がどのように分担されているか、を見ることによって検討される。家事の分担は、後者の仕事の分担において扱われる。分析の結果、第1の意思決定については、「夫がより多く決定する傾向があるが、概ね平等」(Blood and Wolfe, 1960: 23)ということが、また第2の世帯における仕事の分担については、伝統的な性別役割の線に従って専門分化している(つまり、修理や芝刈りは夫、料理や皿洗いは妻が行なう)ことが明らかになった。この仕事の分担の実態について彼らが行なった解釈は、夫婦が伝統的な性別役割のイデオロギーに従ったために上のような分担になったのではなく、もっと実践的な理由、つまり夫婦のうち時間や技術のある方がそれを行なった結果であるというものである。つまりブラッドとウルフによると、1950年代のアメリカで、家事の分担を決定する基本原理は伝統的イデオロギーではなく、「適切さ (appropriateness)」(Blood and Wolfe, 1960 : 56-57)であるとされる。

次に、ブラッドとウルフは、そのような構造のもとで、当時のアメリカの結婚がそれに期待される機能(経済的扶養=生活水準の維持、子供を持つこと、伴侶性、情緒的サポート、愛情など)を果たしているかどうかを、それぞれの機能に対する満足感を見ることによって検討する。その結果、ほとんどの妻はそれらに満足していることが明らかになる。この結果をもとに彼らは、アメリカの結婚は崩壊しつつあるのではなく、再適応の過程にあると結論づける。

では、この研究において、どのような背後仮説のもとに、家事の実証研究が行なわれているのだろうか。ブラッドとウルフが第1に明らかにしようとしたのは、当時のアメリカにおける夫婦関係のパターンであって、家事そのものではない。家事の分担は、端的にいうと、夫婦の関係性を映す鏡として概念化され測定されている。その結果、家事が家族員の生活を維持するための「労働」であるという側面は相対的に軽視された(Berk, 1985)。

このことは、次の3点において見られる。第1に、測定のために選ばれた家事項目である。それらは、①自宅とその周辺の修理、②芝刈り、③雪かき、④お金や請求書の管理、⑤日用品の買い物、⑥平日における夫の朝食の用意、⑦友人が来る時の居間の片付け、⑧夕食の皿洗い、のそれぞれを誰が行なっているかというものである。これら8つの家事リストの選択の基準は、ブラッドとウルフによると、第1にほとんどの家族が行なっていること(したがって、育児に関する項目は省かれている)、第2に論理的に夫婦どちらも行なうことが可能であること(したがって、皿洗いに関しては夕食のそれが選ばれている)である。しかしこのリストを見ると、伝統的に男の仕事と見なされることと女のそれとを

家事はどのようにとらえられてきたか?—「公共／家内領域の分離」という社会認識との関連から (大和)

ほぼ同数含めるといふ配慮がされていることは明らかである。このような配慮の結果として、家族の日常生活にとってより緊急で欠くことのできない家事、たとえば夕食を作ること、普段の掃除、洗濯などがリストから省かれている。たしかにブラッドとウルフが選んだ①～⑧のような家事は、夫婦の役割分担のパターン（特に、伝統的に男性的と見なされてきた家事と女性的と見なされてきた家事を誰が行っているか）を明らかにするという研究目的には、それほど問題ないかもしれない。しかし、家族生活の維持のために不可欠な労働を誰が行っているかを明らかにするためには、そのような重要な労働が除かれたリストを用いることは、不適切であるといえよう。

第2に、ブラッドとウルフは、家事の遂行が世帯の経済的生活水準に影響を与えるとも考えていない。彼らがこのテーマを扱っているのは、結婚の「経済的機能」(the economic function)の章であるが、ここで論じられているのは、職業(市場)労働と、自家消費のための生産活動(パンやケーキを焼くこと、野菜を作ること、保存食料を作ること、衣服を作ること)であり、後者の自家消費のための生産は、当時のアメリカでは、経済的機能を持つというよりは、趣味の色彩が強いと結論づけている。これ以外の、毎日の食事の用意をすること、洗濯、育児といった活動は、経済的機能を果たす活動としては、まったく取り上げられていない。つまり、職業(市場)労働のみが経済的機能を果たし、職業(市場)労働における収入の多少が世帯の生活水準の高低を決定すると考えられている。その一方で、家事労働の遂行の度合いが生活水準を左右するとは考えられていない。

第3に、夫と妻の家事分担が何をもたらすかの評価に関しては、結婚満足度による評価しか行っていない。たしかに、彼らの研究目的(家事分担が夫婦関係のパターンを表していると想定して、その実態を明らかにし、それに対する当事者の満足感を調べることによって、家族が崩壊に向かっているか否かを評価する)に対しては、これで良いであろう。しかしながら、家事が労働であるという側面に目を向けるならば、労働に対する評価としては、満足感といった精神的側面の評価に加えて、物質的な側面における評価(家事を行なうことによってどのような物質的な報酬あるいは生活の保障が得られるか)をあわせて行なうことが不可欠である。しかし、そのような物質的な側面における家事の評価はない。

これらのことから、ブラッドとウルフが、家事分担についての研究から明らかにしようとしたのは、第一に夫婦関係のパターンであり、それに比して、家族員の生活を維持するために不可欠な労働を誰が行っているかという問題意識は相対的に稀薄であるといえる。このようにブラッドとウルフが、家事分担を、労働の分担としてはとらえず、関係性の表れととらえた背景には、家庭での活動をおもに「表出的」ととらえ、家族をパーソナ

リティ機能と関連づけるパーソンズの家族観がある。そしてさらにその背後には、「公共領域=生産・労働=男性、家内領域=非生産・非労働=女性」という、近代社会科学を支える社会認識があるのである。この社会認識を一部覆し、家事を労働にとらえ、家事分担における精神的満足感よりもむしろ、その経済的報酬の無さについて問題視するという理論的視点が出てくるためには、次の第2段階の研究を待たなければならなかったのである⁴⁾。

ここでの検討から我々が学ぶべき点は、家事分担は2つの側面からとらえなければならないという点である。1つはブラッドとウルフが採用した視点であり、家事分担のパターンに対し、当事者が満足しているか否かに注目する視点である。この視点をとると、たとえば家事の分担が不平等でも、当事者が満足していれば、その分担は問題ないと見なすことができる。2つめの視点は、家事を無償労働としてとらえ、それに対する物質的報酬に目を向ける視点である。この視点をとるならば、不平等な家事の分担は、当事者が満足している／いないとは別の次元で、問題ある分担と見なすことが可能である。家事分担に対しては、どちらか一方ではなく、この両方の視点で見ていくことが必要である。「分担は不平等だけど、それで満足」というのが、ブラッドとウルフの研究以後、多くの調査研究が明らかにしてきた夫婦の家事分担の現実だからである (Berk, 1985)。

(2-5) 第1段階のまとめ

以上から、第2派フェミニズムより前においては、「公共領域=生産・労働=男性、家内領域=非生産・非労働=女性」という社会認識が暗黙のうちに前提とされ、そのために、家事を労働にとらえることを可能にするような、分析枠組みは存在しなかった。これらの枠組みにおいては、家内領域は消費の場であったり、情緒的な要求を満たす場であったり、また家族関係が様々な形で現れる場(勢力行使や役割分担)としてとらえられていたが、家族を支えるために必要なモノやサービスの生産が日常的に行なわれている場、つまり労働の場であるとは(少なくとも明示的には)とらえられてこなかったのである。

3. 第2段階——家事は「労働」だ!

しかしながら1960年代の末頃から、「公共領域=生産・労働、家内領域=非生産・非労働」という社会認識に疑問が投げかけられ、それに応じて、家事を「労働」ととらえる見方が現れはじめた。この章では1つめとして、イギリスにおいて、マルクス主義者やマルクス

家事はどのようにとらえられてきたか？—「公共／家内領域の分離」という社会認識との関連から（大和）

主義に影響を受けたフェミニストたちの間で行なわれた「家事労働論争」（the Domestic Labour Debate）、2つめとしては、パーソンズらの機能主義社会学への批判として行なわれたオークレー（Oakley, Ann）による家事の研究、そして3つめとして、新古典派経済学の枠組みの中で家事を生産活動としてとらえようとしたベッカー（Becker, Gary）らの「新家庭経済学」（New Home Economics）をとりあげ、順に見ていく。

ところでなぜこの時期において、家事に対する視線がこのように変化し、家事を労働ととらえる視点が現れたのか。その原因として、一方で、女性の労働市場への参加が増大したこと、もう一方で、それにとまなう様々な家事関連商品の登場によって家事の外部化・商品化が進んだことがあげられる。相互に関連するこの2つの変化によって、女性が公共領域で行なう活動と家内領域で行なう活動が、直接比較できるようになった（Himmelweit, 2000）。この比較によって、ほぼ同じ内容の活動にも関わらず、なぜ一方は賃金が支払われるのにもう一方は支払われないのか、という矛盾が誰の目にも明らかになってきたのである。

（3-1）「家事労働論争」における「家事」

まず、イギリスにおいて、マルクス主義者たちによって行われた「家事労働論争」（the Domestic Labour Debate）について見ていこう⁵⁾。1960年代に入ると、欧米先進諸国においてフェミニズム第2の波が高まりを見せる。それに先立つ19世紀の後半から20世紀のはじめにかけて起こったフェミニズム第1の波においては、女性の高等教育を受ける権利、参政権、職業を持つ権利など、公共領域における女性の権利が運動の中心に置かれた。一方、女性の家庭役割そのものに疑問が持たれることは比較的少なかった（Tong, 1995 [1989]）。それに対して、フェミニズム第2の波においては、それまで「自然なこと」とされてきた女性の家庭役割に疑問が呈されるようになった。そして、家庭役割の中心である家事が、女性の低い地位と結びつけて考えられ始めた（Friedan, 1963=1977）（Gavron, 1966=1970）。

このような変化を背景にして、家事を労働とみなし、それを社会理論の中に取り込もうという試みが行われるようになった。それまでの「社会」についての理論といえば、おもに公共領域を対象にしていた。それに対してこの試みは、「公共領域と家内領域の分離」という前提はそのままに、家内領域（家事はここで行なわれると見なされた）を全体社会の理論に含め、公共・家内両領域の関係を分析しようというものであった。その1つの現れが、マルクス主義者たちによる家事労働論争である。論争のきっかけとなった論文の1つは、ベンストン（Benston, Margaret, 1997 [1969]）のものである。

ベンストンの関心は、女性の地位がなぜ男性より劣るのかという問題である。ベンストンはこの問題に、マルクス主義の立場から答えようとした。これまでこの問題は、マルクス主義における社会の階級構造についての分析において無視されてきた。その理由は、マルクス主義において階級は、生産手段との関係（すなわち生産手段を所有する者と、それを所有せず労働力を売る者という区別）によって定義されてきたが、女性は家内領域に位置するため、生産手段と固有の関係を持たないと考えられていたからである。したがってマルクス主義ではこれまで、女性の地位が男性より劣っている理由は、生産における関係ではなく、社会化、心理的要因、結婚制度などによって説明されてきた。しかしもし、「女性はグループとして、生産において男性とは異なる特殊な位置を占める」ということを示すことができれば、マルクス主義による社会の階級構造の分析を、女性の状況についての分析にも応用することができる。

それでは、生産における女性の特殊な位置とは何であろうか。ここでベンストンは、使用価値と交換価値という概念を導入する。商品は使用価値と交換価値を持つ。商品交換が高度に発達した資本主義社会においては、多くの生産物は交換価値を持つ商品として生産される。しかし資本主義社会においても、交換価値を持たず使用価値しか持たない生産物もある。その1つが、家庭で生産されるモノやサービスであり、これらの生産は女性の仕事とされている。このように家事（育児を含む）を女性に、そして商品生産を男性に割り振ることは、女性は生産において男性と異なる位置に立つことを意味する。つまり、家事は社会的に必要な生産活動であるが、金銭が価値を決定する社会においては、家事に携わる女性は集団として貨幣経済の外に置かれ、その仕事は貨幣に値せず、したがって価値がなく、本当の仕事ではないと見なされる。女性の劣った位置の物質的基盤は、この点にあるとベンストンは主張する。ではなぜ家事は商品生産の外にあるのか。ベンストンは、生産が親族単位から離れ、より大規模・効率的に組織されるという産業化の全体的な流れから、家事が取り残されたためと見ている。

では女性をこのように家庭にとどめておくことには、どのような意味があるのか。ベンストンは、そのようにすることが、資本の利益にかなうからだと論じる。すなわち女性が無償で家事を行ない、しかも労働予備軍として存在するという2つの理由によって、資本は、男性労働者に支払う賃金を抑えることができるのである。したがってベンストンは、女性の解放のためには、第1に女性が賃労働に就く機会を男性と平等なものにすること、第2に、そのために女性を家事から解放することが必要だと述べる。後者のために、家事の社会主義的な社会化（資本主義的なそれではなく）が必要であり、そのためには、社会

家事はどのようにとらえられてきたか?—「公共／家内領域の分離」という社会認識との関連から (大和)

主義革命が必要となるのである。

要約すれば、ベNSTONが主張したのは、家事は社会的に有用な労働であること、ただし交換価値は生まないこと、家事により資本家は利益を得ていること、女性の低い地位の物質的基盤は、家事責任のため商品生産から排除されていることにあること、そして、女性解放のためには女性の賃労働者化と家事の社会主義的方法による社会化が必要であることなどである。

この論文を1つの契機として、家事労働論争と呼ばれる論争が起こった。この論争は、おもにマルクス主義の影響を受けた人々によって争われたために、主な論点は、マルクス主義経済学の問題構成の制約を受けていた。論争における第1の争点は理論的なものであり、家事は交換価値(マルクスのいう意味での)を生む労働なのか(したがって剰余価値を生むのか)、それとも単に使用価値を生むだけなのか、というものであった。第2の争点はより政治的なものであり、第1の論点を受けて、主婦(家事専業者)は、主婦のまま労働者階級の資本に対する闘争の主体になれるのか、あるいは賃労働者化することによってはじめて、階級闘争の主体になれるのかというものであった。以下では論争の主な参加者である、ダラ・コスタ(Dalla Costa, Mariarosa)とセルマ・ジェイムス(James, Selma)、セコム(Secombe, Wally)、ハリソン(Harrison, John)の議論を取り上げる。この3者は、これから見るように、ベNSTONと同様、家事は使用価値を生む労働であるという認識では一致している。したがって、労働者の生活水準は、賃金(+国家からの給付)のみによって決定されるのではなく、賃金+家事労働(+国家からの給付)によって決定されると考えている。したがって、家事労働が無償で行なわれることによって資本家は、労働力再生産のための費用、すなわち賃金を抑えることができるという点でも一致している。

論者の中で意見のくい違いが起こったのは、第1に、家事は交換価値を生産する労働であるかどうか(したがって剰余価値を生むかどうか)という点である。ダラ・コスタとセルマ・ジェイムスは次のように論じる。労働者の労働力には交換価値があり、それが生産の場で剰余価値を生むのだが、その労働力を日々再生産しているのは家事労働である。したがって家事は、労働力という交換価値を生むし、剰余価値の隠された源でもある(Dalla Costa and James, 1997 [1972]) (James, 1997 [1972])。

これに対し、セコムやハリソンは、たしかに家事は使用価値を生産している(社会的に有用な労働である)が、交換価値は生産しておらず、したがって剰余価値も生んでいないと論じる。その根拠としてまずセコムは、生産的労働(すなわち交換価値を生産する労働)とは、資本との直接的な関係のもとで剰余価値を生み出す労働であると、マルクスが定義

しているからだ論じる。マルクスの定義がこうだから、家事はたしかに有用であるが、マルクスのいう生産的労働ではない。つまり交換価値を生産する労働ではなく、したがって剰余価値を生み出さないと論じる (Secombe, 1974)。一方ハリソンは、家事と商品生産を区別するために次のような議論を組み立てる。まず、全体としての資本主義システムはその中に複数の生産様式 (a mode of production) を含んでいる。複数の生産様式のうち主なものは、商品を生産する資本主義的生産様式 (the capitalist mode of production) と、使用価値を生産する家内的生産様式 (the domestic mode of production) である。そして家事は、後者の家内的生産様式に属しているため、交換価値 (商品) を生産しては、したがって剰余価値も生み出していない (Harrison, 1973)。このように議論の根拠は異なるが、セコムもハリソンも、家事は交換価値を生まず、したがって剰余価値も生んでいないと主張した。

第2点めの、主婦 (家事専業者) は主婦のまま労働者階級の闘争の主体になれるかという点に関しては、まずダラ・コスタらは、主婦は家事によって剰余価値の生産に関わっているのだから、労働者と同じ資格で階級闘争の主体になれるのは当然であると論じる。そして彼女らは、資本家との闘争の戦略として、主婦が賃労働者化することではなく、家事労働に賃金を要求することを提案している。つまり、主婦は家事労働によってすでに剰余価値を生産しそれを搾取されているのだから、その上に賃労働に就くことは二重の搾取を受けることになる。それよりむしろ、家事労働に賃金を要求するという戦略を取るべきであり、それによって家事の社会的必要性を社会に認識させ、家事の社会化を進め、より包括的な社会改革を目指すことができる。このように主婦は主婦のまま、資本に対する闘争の先頭に立つことができるというのが、ダラ・コスタらの主張である (Dalla Costa and James, 1997 [1972])。

それに対してセコムやハリソンは、主婦は交換価値を生産しておらず、したがって剰余価値の生産にも携わっていないのだから、それ自体では労働者階級ではなく、したがって階級闘争の主体にはなれないと論じる。セコムやハリソンの考えによると、主婦は、階級闘争と共闘することはできるが、十分な資格のある主体になるためには、賃労働者になることが必要不可欠なのである (Harrison, 1973) (Secombe, 1974)。

このような、ダラ・コスタら 対 セコムやハリソンの考えにおける違いを生み出したのは、前の第1段階の研究レビューで見たマルクスの生産中心主義的、階級中心主義的な考えに、どれだけ距離をとっているかにおける違いであると思われる。セコムやハリソンは、生産の場こそが価値を生み、したがって搾取はそこで起こるというマルクスの考えに忠実

家事はどのようにとらえられてきたか？—「公共／家内領域の分離」という社会認識との関連から（大和）

であり、階級関係（資本家－労働者関係）に焦点を当てて考察している。したがって今日から見ると奇妙なことに、セコムもハリソンも無償の家事労働が、労働者（≒男性）にとっては賃金の引き下げの原因になり、したがって資本にとっては利益になるということははっきり指摘しているが、それが家事労働者（≒女性）にとってどのような意味を持つのか、また夫と妻の関係においてどのような意味を持つのかという点については、ほとんど注意を払っていない。このことは一見不思議なことに思えるが、彼らの理論枠組——つまり、家事は剰余価値を生み出さず、したがって資本家による搾取もありえない、しかも社会の分析において本質的なのは生産関係に基づく階級関係（資本家－労働者関係）であり、同じ労働者階級内のジェンダーによる立場の違いは取るに足りないものである——からすると、当然のことなのであろう。彼らが主婦に同情的な議論をしているのは、主婦は相互の連帯がなく孤独であるとか、夫に経済的に依存しているとかという点であり、主婦もその労働の成果が無償で他者（資本家あるいは夫）によって利用されているというような視点は無い。

一方、ダラ・コスタらは、マルクスの生産中心主義的な考えからは距離を置いている。したがって商品生産の場のみでなく、家庭やコミュニティにおける労働も交換価値・剰余価値を生み、そこでの労働に対しても資本家による搾取は起こりうるという認識に沿って議論している。さらに彼女らの議論は、主婦（≒女性）と資本家の関係に注目しており、資本家にとって無償の家事労働が利益であるということと同じ比重で、主婦にとってそれが搾取であることを主張している。この点はハリソンやセコムと異なる点である。

ただし、マルクスの階級中心主義との距離について見ると、ダラ・コスタらも、セコムやハリソンと同様に、労働者階級 対 資本家階級という枠組みを重視して論じているため、同じ労働者階級である主婦とその夫との利害の対立は、資本家による労働者の支配・搾取から派生していると考えられている。したがってダラ・コスタらの第一の関心は、セコムやハリソンと同様、性支配ではなく階級支配への挑戦なのである。この点が、次の第3段階において、ハートマン（Hartman, Heidi）らのマルクス主義フェミニストがダラ・コスタらの議論を批判した点である。

このように、家事労働論争でダラ・コスタらとセコムやハリソンの議論を分けたのは、公共領域と家内領域をどうとらえるか（つまり、生産は公共領域のみで行なわれていると考えるのか、あるいは家内領域においても行われていると考えるのか）という社会認識のあり方の違いだったのである。

以上見てきたように、家事労働論争の問題点の1つは、マルクス主義経済学の問題構成

の枠内で、その分析概念やカテゴリーを所与として、それを再検討することなく行なわれたということである。そのために、マルクス経済学にコミットしない人にとっては、この論争はあまり意味の無いものに思われただろう。また、商品生産の分析のためにつくられたマルクスの概念やカテゴリーが、家事の分析にそのまま適用できるのか、といったことも検討されなかった (Molyneux, 1979)。

もう1つ、フェミニズムの立場に立つ人々にとってさらに大きな問題は、家事労働論争においては、「家事は女性がすること」という前提の上で議論が行なわれており、「そもそもなぜ、男性でなく女性が家事をするのか」という問いはほとんど問われなかったという点である (Gardiner, 2000) (Molyneux, 1979)。またこれに関連して、女性による家事が資本にとって利益かどうかについては論じられたが、それが労働者階級の男性にとってはどのようなかということについてはほとんど論じられなかった。ダラ・コスタらの議論も、これらの点では他の論者と同じである。したがってこの論争において、家事が労働としてとらえられたことは、家事研究の発展にとってたしかに1つの、しかも大きな前進であった。しかし、家事と女性のつながり（逆にいうと、家事は男性の仕事ではないということ）は相変わらず当然視されたのである。

(3-2) アン・オークレーの家事研究

家事労働論争が伝統的マルクス主義における家事の扱いに対する批判であったとするならば、アン・オークレー (Oakley, Ann) の家事研究は、パーソンズに代表される構造機能主義の社会学における家事のとらえ方に対する批判であり、彼女は家事を労働ととらえる視点から研究を行なった (Oakley, 1974=1993)。

オークレーは労働の定義——①エネルギーを使わなければならない、②モノやサービスの生産に貢献する、③社会的相互作用のパターンがある、④社会的地位が付与される、⑤金銭をもたらす (Vroom, 1964) ——を検討し、⑤の金銭をもたらすという点を除くと、家事は労働であると考えた。しかしこれまでの社会学の枠組みにおいては、家事を労働ととらえることは不可能である。まず家族社会学においては、女の役割が妻であり母であり主婦であることに焦点を絞るが、家事労働者として主婦の役割を見ることはない。また労働社会学においても、研究対象は職業（市場）労働であり、家事労働は扱われない⁶⁾。このように伝統的な社会学は、家事を労働としてではなく、家庭での女の役割の1つとして扱ってきた。つまり「労働としての家事」の研究は、社会学から完全に抜け落ちた課題となってしまうのである。

家事はどのようにとらえられてきたか？—「公共／家内領域の分離」という社会認識との関連から（大和）

オークレーは、その原因の大きな部分は、性別役割に関するイデオロギーにあると見ている。このイデオロギーは、オークレーによると、社会生活の構造ばかりでなく、社会学の構造をも支えている。性別役割に関するイデオロギーの基本的な論理は、①女は家族に属し、男は労働に属する、②それゆえ男が働き、女は働かない、③それゆえ、家事は労働の一形態とはならない、というものである。この論法が、社会学者をして、家事を労働としてとらえるのを妨げている。加えて、社会学における構造機能主義の理論は、家族における男女の役割を、男＝道具的＝経済的、女＝表出的＝情緒的としてとらえる。これが、家事を労働としてとらえることをますます難しくしている。このような考察に基づいてオークレーは、家事を労働としてとらえるという、社会学の伝統にはないやり方で、家庭での主婦たちの状況にアプローチした。

その結果明らかになったことは、主婦たちの、家事についての態度と、主婦という役割についての態度とは区別してとらえる必要があるということである。主婦という役割に対する態度は、心理的アイデンティティを何に求めるかに関連している。これには階級差が見られ、中流階級の主婦役割に対する態度はやや否定的であったが、労働者階級のそれはより肯定的なものであった。一方、家事に対する態度は、家庭での「労働」に対する態度として理解されるべきだとオークレーは主張する。この家事に対する態度においては、労働者階級と中産階級の間で違いは見られず、どちらの階級においても、家事への不満が多く、単調さ・こまぎれ・オーバーペースといったことを工場労働者よりも強く感じており、孤独を訴える主婦も多かった。また、料理、掃除、買い物といった個々の家事項目に対する態度は、個人の好みによる差より、その活動が行なわれる条件（人と話す機会があるか、環境や道具は整っているか、時間に追われることはないかなど）によって異なる。したがって、主婦たちが家事に孤独や単調さといった不満を感じるのは、それが家事という労働に本質的なものだからである。そしてこれらの結果は、家事を労働ととらえることの妥当性を示していると彼女は結論づける⁷⁾。

以上より、オークレーの研究も、「公共領域＝生産・労働＝男性、家内領域＝非生産・非労働＝女性」という社会認識に意義を申し立て、家事を労働ととらえる視点を提示したのである。

（3-3）新家庭経済学における家事

新古典派経済学のパラダイムにおいても、1960年代に、家事を生産活動（＝家庭内の労働）ととらえる理論的視点が現れた。「新家庭経済学」（the New Home Economics）と呼ば

れる枠組みである。

伝統的な新古典派経済学は、公共領域における活動を「生産」や「労働」、家内領域における活動を「非生産」「非労働」と見る二分法に基づいていた⁸⁾。この見方に対して、新家庭経済学と呼ばれる一派に属する人々は、家庭を生産的活動のための場所として概念化し始めた。この立場の代表的論者であるベッカー (Becker, Gary) によると、世帯は「小さな工場 (a small factory)」である。つまり世帯は、清潔を保ち、食事をし、生殖し、またその他の有用な生産物を作るために、市場から購入された商品 (モノやサービス) と、世帯内での労働 (家事労働) が結合される場所である。世帯は効用 (つまり世帯の福祉 well-being) を最大化するように、商品と家事労働を結合する。商品と家事労働をどれだけ投入できるかは、収入と時間という2重の制約を受ける。つまり、商品をどの程度購入できるかには、収入の制約があるし、家事労働をどの程度投入できるかには、1人あたり1日24時間という時間の制約 (そのうち労働に振り分けることのできる時間はさらに短い) と、収入労働の時間が増えればそれだけ家事労働の時間は減るという時間の制約がある。このような制約のもとで、世帯は、市場における商品の値段や、1人1人の世帯メンバーの労働生産性 (単位時間あたりの賃金の高さや、家事の効率) を考慮しつつ、世帯の効用が最大化するように、各世帯メンバーに対して家事労働と市場労働を配分する (Becker, 1965)。

このモデルにしたがうと、世帯の効用を最大化するために、市場労働における生産性が高い (賃金が高い) 世帯メンバーは、市場労働の時間を長くし、その分家事労働の時間を短くする。一方、家事労働における生産性が高い (家事を効率よくできる) 世帯メンバーは、その逆である。妻が家事を行なうのは、妻の方が家事の効率がよく、かつ夫の方が賃金が高いためである。ではなぜ夫と妻で、市場労働と家事労働における生産性がこのように異なるのか。ベッカーによると、それまでの人生において、妻は家事の生産性を上げるような、一方夫は市場労働における生産性を上げるような、人的資本への投資を行なっている (たとえば、社会化・教育・訓練などを受けている) からである。このことがそれぞれの生産性の違いとして現れているのである (Becker, 1993 [1981])。それではなぜ人的資本への投資のしかたが、このようにジェンダーによって異なるのか。ベッカーは、男女の生物学的な違い——出産・育児に関連する「生物学的」なジェンダー差が、女性に、家事労働の生産性における初期の比較優位を与える——をほのめかすほかは、明確な説明を行っていない (Becker, 1993 [1981])。つまりこの考え方によると、男女の賃金格差、ひいてはその結果として女性がおもに家事を担うことは、「生物学的性差に対する合理的

家事はどのようにとらえられてきたか?—「公共/家内領域の分離」という社会認識との関連から (大和)

な反応」(Berk, 1985: 33) であるということになる。

ベッカーの研究に対しては様々な批判がされている⁹⁾。しかし、彼の研究の功績は第1に、「公共領域=生産・労働、家内領域=非生産・非労働」というそれ以前の新古典派経済学の常識(それは社会科学全般における支配的な社会認識を反映している)を否定し、家内領域においても生産労働が行なわれているという理論的視点を示した点である。第2に、ベッカーのモデルは、公共領域における労働をどの世帯メンバーがどれだけ分担するかということと、家内領域における労働のそれは、強い相互既定関係にあるという立場をとっていることである。つまり、公共領域の労働の研究と家内領域のそれとは、まったく別々にできるわけではなく、一方を研究するためには他方を考慮に入れなければならない、ということを示した点である。

(3-4) 第2段階のまとめ——「労働」としての家事

今まで見てきたように、伝統的マルクス主義に対する家事労働論争、構造機能主義社会学に対するオークレーの研究、そして伝統的新古典派経済学に対するベッカーらの新家庭経済学、といった論争や研究の結果として、家事を「労働」と見なす新しい認識が誕生した。フェミニズムの立場に立つ人々(特にマルクス主義の人々)は、家事労働論争の中でほぼ一致点を見た、「家内領域において、女性に強制された、無償の、家族の労働力再生産のための労働」という視点で家事を見るようになっていった。一方、新家庭経済学の立場に共感を寄せる人は、家事を「家内領域において、女性(あるいは世帯)が合理的計算に基づき選好した、女性による、家族の効用向上のための労働」と考えるかもしれない。いずれにしろ、家事を「労働」と見なすための突破口が開かれたのである。家事についてこのように認識が変わることは、同時に、家族の生活水準は何によって達成・維持されるかについての認識も変える。家事が労働と認識されることによって、生活水準は、賃金(+国家からの給付)のみによって達成されるのではなく、賃金+家事労働(+国家からの給付)によって達成されると考えられるようになったのである。

次に問題になるのは、「なぜ家事は女性の労働なのか」という点である。そこで次の第3段階で、これを説明するための理論を見ていこう。

4. 第3段階——なぜ女性が家事をするのか?

家事労働論争、オークレーの家事研究、新家庭経済学の登場などを経て、家事は労働で

あるという認識が社会学において広まっていった。そして次に、そのような家事を行うのは「なぜ男性ではなく女性なのか」が問われ、これを説明しようとする研究が現れた。そのような研究は、その説明において何を重視するかによって、次のように大きく4つに分類することができる。まず、女性が家事をすることについて社会構造による制約を重視するものと、主体（女性）の選択を重視するものに分けられる。そしてこの2つのそれぞれにおいてさらに、物質的・経済的側面を重視するものと、非物質的・非経済的側面を重視するものに分けることができる。第1の、社会構造の物質的・経済的側面における制約を重視する研究の例としては、ハートマン（Hartman, Heidi）の資本制と家父長制の2重システム理論があげられよう。第2の、社会構造の非物質的・非経済的側面における制約を重視する研究の例としては、先に見たオークレーの性役割イデオロギーを強調する視点があげられよう。第3の、物質的・経済的理由に基づく個人の選択を重視する説明としては、先に見たベッカーの経済合理性に基づく男女の労働の分業という理論があげられよう。そして第4の、非物質的・非経済的理由に基づく個人の選択を重視する視pointsの例としては、女性のアイデンティティとケア役割の関連を強調したチョドロウの理論（Chodorow, Nancy）があげられよう。

上の4つの分類のうち、第2のオークレーの研究と、第3のベッカーの研究については、先の第2段階のレビューですで見たと。ここで見る第1のハートマンの研究と、第4のチョドロウの研究は、80年代以降のフェミニストに大きな影響を与えた理論である。ハートマンの理論は家事の労働としての側面や物質的・経済的側面を強調した理論であるのに対し、チョドロウの理論は家事をする人の心理やアイデンティティに注目した理論である。このように家事の研究において2つの側面のどちらか一方のみを強調する研究傾向に対して、グラハム（Graham, Hilary）はこれら2つの視点を統合した家事の研究・理論が必要であることを主張した。そしてパーク（Berk, Sarah Fenstermaker）は、2つの視点を統合しようとする研究を行った。以下では順に、ハートマン、チョドロウ、グラハム、そしてパークの研究を見ていく。そしてこれらの研究を踏まえて、家事は経済的・物質的側面と、心理的・情緒的側面の両方からとらえられなければならないことを指摘する。

（4-1）ハートマンの2重システム論

ハートマン（Hartman, Heidi, 1981=1991）は、これまでのマルクス主義者（たとえば家事労働論争の参加者）およびラディカル・フェミニストによる女性の抑圧についての分析を、それぞれ次のように批判する。まずマルクス主義者に対しては、たしかにマルクス主

義の理論は、資本主義社会の多くの側面の本質を理解させてくれる。しかし、マルクス主義者による女性の位置についての分析は、ほとんどの場合、経済システムとの関係を問題にしており、女性と男性の関係は問題と見なしていない。つまりこの種の分析は、女性を労働者階級のカテゴリーに含め、女性の抑圧を階級抑圧の一側面として理解しようとする。そして男女の関係は資本-労働者関係を検討することで説明できるということをその理論的前提にしている。その結果、男性が女性の家事労働から利益（ぜいたくな消費、余暇時間、個人的サービスなど）を得ている点を無視している。また、なぜ特定の人々が特定の場を占めるのか（つまり、なぜ市場労働は男性で家事労働は女性なのか）を説明しない。

一方、ラディカル・フェミニズムに対しては、ハートマンは次のように述べる。ラディカル・フェミニズムは、人類の最も基本的な支配・被支配関係は性別間のそれであり、歴史の原動力は、権力と女性支配を獲得しようとする男性の闘いであるとする点で、マルクス主義が見逃した点に注目している。しかしラディカル・フェミニズムの問題点は、心理的・イデオロギー的要因に、あるいは性的・生物学的要因に注目するあまり、歴史に対する理解が欠けている点である。ラディカル・フェミニストは、女性に対する男性支配を際立った特徴とする社会組織を家父長制と呼ぶが、この定義によっては、多様な社会における多様な家父長制のあり方を区別することができない。

そこでハートマンは「家父長制」を次のように定義する。「物質的基盤を持つ一連の社会関係であり、男性間のヒエラルキー的關係と、男性に女性支配を可能にするような男性間の連帯が存在する社会関係である。男性は家父長制内で、異なる社会的地位を占めるが、女性に対する共通した支配関係にあることで連帯する」(Hartman, 1981=1991: 48)。家父長制の物質的基盤は、男性による女性の労働力の支配にある。この支配は、重要な経済的生産資源から女性を遠ざけることにより、そして女性のセクシュアリティを制約することにより維持される。家父長制は家族だけではなく、市場や国家を含めたあらゆる生活の場を支配している (Hartman, 1981=1991: 49)。マルクス主義や社会学一般においても、「家父長制は資本制の成立に伴い過去のものになった」という考え方がある。しかしハートマンはそれを誤りであるとして退け、家父長制は適応力に富むものであり、資本主義社会においても、それに適応する形で健在であると主張する。

それではこのような家父長制は、資本主義社会の中ではどのように現れるのか。ハートマンによると、家父長制（男性による支配）と資本制（資本家による支配）は、女性の労働力をめぐって利害が対立する。このような対立は19世紀にも見られた。産業革命によって女性や子どもが男性から独立して賃金を稼ぐことができるようになり、資本家は彼女／

彼らを低賃金で雇うことで利益を得た。しかし一方で、家庭における男性の家父長的権威は弱体化し、男性の賃金も低く押さえられた。このような、家父長制と資本制の間に生じていた女性（と子ども）の労働力をめぐる利害対立を解決するものとして現れたのが、19世紀末～20世紀初頭にかけて発達した家族賃金と、女性や子どもに対する労働保護立法である。家族賃金によって、男性労働者は、自分1人で家族を養うに十分な額の賃金を要求し、それと同時に、労働保護法によって、成人した女性が家庭外で就労することを制限した。これらにより、女性は夫に経済的に依存せざるを得なくなり、一方男性は経済的扶養と引き換えに妻による家庭でのサービスを確保することができた。またこの解決策は資本制の利害にもかなうものだった。なぜならばこの再調整により、労働者家族の安定した再生産が可能になる上に、女性は資本にとってよき消費者となったからである。(Hartman, 1981=1991)

第2次大戦後から今日における家父長制と資本制の再調整のあり方は、先に述べた19世紀末～20世紀初めの状況とは異なる。ハートマンは次のように分析している。今日、女性の労働市場参加の増加や、家事労働の資本主義的商品化にともない、家族賃金に見られた男性が稼ぐという理想は、女と男がともに賃労働者となって家族の現金収入に貢献するというものへ変化したといえるかもしれない。しかしこの中で、性別職務分離（性別によって就ける職種を制限し、男性には安定・高賃金の職種を、女性にはそうでない職種を割り当てる）による男女の賃金格差は、家父長制にとってますます必要になった。これがこの時期における家父長制の最も重要な要素である。性別職務分離によって、市場労働においては、男性は女性より有利な労働に就くことができるし、またそれによる賃金格差により、家庭では、女性の男性への経済的依存を継続させることができ、この依存と引き換えに、女性は家事労働を無償で担い続けることを余儀なくされる。つまり性別職務分離という家父長制の新しい戦略により、家庭内・外における、男性による女性の労働力の支配が可能になっているのである（Hartman, 1981=1991）。

以上から明らかなようにハートマンは、ともに物質的な基盤を持つ、家父長制と資本制という2つのシステムの間の、緊張と妥協の結果として、女性の地位を理解することを提案している。そして家族賃金の時代から今日に至るまで、女性がなぜ家事労働を割り当てられるのかについては、家父長制の要求（夫・父による妻・娘の労働力の支配）に資本制が適応した結果であると考えている。そしてハートマンは、家父長制はあらゆる生活の場を支配していると述べてはいるが、彼女自身は、女性の労働市場からの排除や性別職務分離に表れているような、市場労働における家父長制——すなわち市場における、男性間の

家事はどのようにとらえられてきたか?—「公共／家内領域の分離」という社会認識との関連から (大和)

ヒエラルキー的關係と、男性に女性支配を可能にするような男性間の連帯が同時に存在する社会關係——に最大の関心を払っている。このように「なぜ家事を女性が行なうのか」に対するハートマンの分析は、男性が連帯して、女性に不利な労働を強制する、といった側面を強調したものとなっている。

たしかにハートマンがいうように、家事を一方的に引き受けることは、その人に物質的不利益をもたらす（とくに、世帯単位でなく個人単位で見るとそうである）。しかしながらその一方で、家事をすることは女性にある種の心理的報酬をもたらす、女性は自ら進んで家事を引き受ける側面もある。その面に注目したのが、次に見るチョドロウの理論である。

(4-2) チョドロウによる女性のアイデンティティとケア役割の関連

チョドロウ (Chodorow, Nancy) は、『母親業の再生産』(Chodorow, 1978=1981) という著作において、家事一般ではなく、家事の一側面、しかも今日においては最も重要な側面である「ケアをする」という側面に注目する。ケアを行うためには、他者の必要や感情をまるで自分のそれであるかのように深く理解し、適切に対処する能力が求められる。チョドロウによるならばこのような能力は、女性の自己 (self) のあり方に適合的である。単にそのような能力が女性にあるというだけでなく、そのようにして自分と他者との連続性を経験することが、女性のアイデンティティと不可分に結びついている。一方男性の自己の経験はそのようなものではない。むしろ、他者との不連続性を経験することが、男性のアイデンティティの特徴である。

それではなぜそのような男女の違いが生まれるのか。チョドロウによれば、自己の経験は幼い頃の養育者との関係によって作られる。母親 (=女性) が養育者である西洋近代社会においては、母親の子どもに対する態度は、子どもが母親と同性か異性かで異なり、それが子どものアイデンティティのあり方に影響を及ぼす。母親は同性である娘の養育をする時は、娘を自分と連続したものとして経験し、そのように扱う。この早期の経験によって、女の子は自分を外界と連続したものと経験するようになり、他者の必要や感情を自分のそれとして経験するようになる。これが後に、他者を世話するための能力の土台となるだけでなく、ケアをすることが女性自身のアイデンティティにとっても必要なこととなるための原初の経験となるのである。それに対して母親は、異性である息子の育児をする時は、息子を自分とは別の切り離された存在として経験し、そのように扱う。このことによって男の子は自分自身を、自他の境界がはっきりした、他から分離した個別の存在として

経験するようになる。このように女性にとっては、自己というものの感覚は世界とつながっており、一方男性にとっては、世界と切り離されている。このような男女のアイデンティティのあり方の違いが、後に、他者のケアをする能力や、ケアをすることが自分自身のアイデンティティにとってどの程度重要でどの程度満足をもたらすのかの違いになって表れる。チョドロウは以上のような理由によって、女性はケア役割を自らひき受けるのだと論じた。

(4-3) 「愛の労働」としての家事

グラハム (Graham, Hiraly) は、なぜ女性が家事をするのかという問いをめぐる2つの研究の流れ (つまり、家事の労働としての側面を強調するものと、心理的意味の側面を強調するもの) を検討し、家事は労働と愛情 (あるいは労働と心理、労働とアイデンティティ) の2つの側面からとらえなければならないと主張する (Graham, 1983)。家事はこの2つの側面をあわせ持つが、今までの研究は、それが属する学問領域 (discipline) の枠組みに従い、そのどちらか一方の面だけを研究してきた。

たとえばハートマンに代表されるような家事を労働と見なす研究 (その多くは、経済学や社会政策研究の領域において行なわれてきた) は、家事を担わなければならないことによって女性が経済的に不利な立場に追いやられることを強調した。しかしその一方で、家事をすることに伴う感情やアイデンティティといった心理的側面を軽視することになった。このことによって、女性がなぜ経済的に不利な労働である家事を、そのことを自覚しつつ担い続けるのか、なぜ家事やケアの外部化に女性自身が消極的なのかといった問いには十分答えることができなかった。一方、チョドロウに代表されるような心理学的研究は、家事、特にケアをする人に求められる心理的特質 (他者の必要や感情をまるで自分のそれであるかのように深く理解し、適切に対処する能力) と、女性 (西欧近代社会における) を特徴づけるとされる性質の共通性に着目し、家事をすることが女性の感情やアイデンティティにおける満足感と結びついている点を強調してきた。しかしながらこのような心理学的な次元で家事をとらえることは、家事が重い労働であること、そしてそのような家事を無償で担うことが女性の人生にどのような影響、特に経済的影響を与えるかということに関する考察を弱めた。

このような検討の上にグラハムは、家事を「愛の労働 (a labour of love)」と概念化すべきである、つまり家事を、感情と労働、アイデンティティと労働といった2つの側面から同時にとらえなければならないと主張する。これは本論文で、第1段階におけるブラッド

家事はどのようにとらえられてきたか？—「公共／家内領域の分離」という社会認識との関連から（大和）

とウルフの研究を批判的に検討した際に指摘したことと同じである。そして次に見るパークの研究は、家事における労働と感情の2つの側面を取り入れたものとして評価できる。

（4-4）世帯効用の最大化とジェンダー・ディスプレイの最適化の関数としての家事

パーク（Berk, Sarah Fenstermaker）は『ジェンダーの工場（The Gender Factory）』（Berk, 1985）において、次のような「不平等だけど満足」という家事分担の実態を示す。すなわち、妻が外で就労している場合でも妻は夫より多くの家事をしており、必要な家事量が増えた場合はその追加分を夫婦で分担するのではなく、妻のみが分担する。それにも関わらず多くの妻と夫がそのような家事のやり方を公平だと感じている。この結果をもとにパークは、先に見たベッカーによる命題——世帯全体としての生産性を最大化するように、夫と妻は合理的計算に基づき市場労働と家事に費やす時間の配分を決める——を批判し、生産性の最大化以外のもっと規範的な力が、家事の分担には働いていると主張する。そのような力の結果として、夫婦間の不平等な家事分担が、大きな不満もなく当事者に受け入れられているのだと主張する。

それではその規範的な力とは何か。パークは、ゴッフマン（Goffman, Erving）のジェンダー・ディスプレイ（gender display）（Goffman, 1979）という概念を導入する。人々は、相互作用場面において、男／女、あるいは夫／妻といった自己の類型的（categorical）なアイデンティティを表示するよう振舞う。ジェンダー・ディスプレイを行なうことは、そのメンバーの類型的なアイデンティティを確立維持し、当該の社会状況において他のメンバーと協調的行動を行なうのに役立つ。ジェンダー・ディスプレイを効果的に行うことは、その行為者のアイデンティティに安定と満足感をもたらすのである。ところで、ジェンダー・ディスプレイにおける振る舞いは、静的で行動の予測が可能なものではない。つまりたとえば、社会的に期待される性別に関する具体的行動のリストが学習され、それがそのまま行動に移されるといった、静的なものではない。そうではなく、様々な状況に応じてそのつど、他者から見て当該文化の規範的期待に従っていると見られるような行動の配置を、行為者が自分自身で作りに出すことである。したがって同じ人が同じ女性（あるいは男性）というアイデンティティを表示する場合でも、状況によってその振る舞いの内容は異なる。しかしその個々に異なる振る舞いは、いずれも、当該文化を共有する他者から「女らしい（あるいは男らしい）」と見えるのである（West and Zimmerman, 1987）。

この概念を用いてパークは、家庭とは、モノやサービスの生産の場であると同時に、ジェンダー・アイデンティティやジェンダー関係の生産の場であると述べる。家庭での行動

において夫と妻は、第1にその家庭で処理しなければならない家事を行なうこと、第2にジェンダー・ディスプレイを行いジェンダー関係を再確認することという、2重の制約に直面し、その両方に適切に対処しなければならない。つまり、市場労働の時間と家事の時間を適切に配分して世帯の効用を最大化するだけでなく、ジェンダー・ディスプレイをも効果的に行ない、当該文化の規範的期待であるジェンダーの理想をも最大化しなければならない。この2つの最適化の制約のもと、家族メンバーは行動の選択を行なう。その結果が、先に見た夫と妻の非対称的な家事の分配であり、しかも彼らがそのやり方に不公平を感じていないことなのである。

このようにパークは人々が、一方で労働、一方でアイデンティティの確認・表示という必ずしも常に相互適合するとは限らない目標をめざして、家事に関して交渉し分担しているのだという視点を示した。

(4-5) 第3段階のまとめ——家事労働における物質的側面と心理的側面

第3段階におけるこれらの研究は、「家内領域において、家族のために、女性が行なう無償の、労働力再生産のための労働」という家事概念を前提にした上で、そのような家事を「なぜ女性が行なうのか」という問題を立て、それに答えようとしたのである。そしてその過程で、家事の研究においては、その経済的・物質的側面（労働）と心理的・情緒的側面（アイデンティティ）の両方を考慮することの必要性が明らかになった。しかしながら、これらの研究が前提にした家事概念は、後に厳しい批判にさらされることになる。これについて次に見ていこう。

5. 第4段階——「公共／家内領域の分離」を越えて

前の第3段階の諸研究は、「家内領域において、家族のために、女性が行なう無償の、労働力再生産のための労働」という家事概念を暗黙の前提にしていた。しかしこの家事概念は、2つの側面から批判を受けることになった。これら2つの批判は相互に密接に関連しており、分けることは難しい。しかし説明を単純化するため、以下のように2つに分けて説明する。

まず第1の批判は、これらの研究は「なぜ女性なのか」という問題を立てたことによって、暗黙のうちに女性を単一のグループと見なすという誤りを犯したというものである。この暗黙の前提により、家事における女性の経験の共通性・普遍性をもっぱら強調し、一

方、女性の中の差異を大きくは取り上げないという誤りを犯すことになった。つまり、「家内領域において、家族のために、女性が行なう無償の、労働力再生産のための労働」という家事概念は、社会のある部分の女性（たとえば白人中産階級の女性）にはそのまま当てはまるかもしれないが、別の部分の女性には当てはまらないかもしれない、つまり後者の女性たちはこれとは異なる形で家事を経験しているかもしれないという、女性の経験の多様性についての考慮を欠いていたという批判である。

第2の批判は、「公共／家内領域の分離」という社会認識に関連している。「家内領域において、家族のために、女性が行なう無償の、労働力再生産のための労働」という家事概念は、「近代社会においては公共領域と家内領域は分離している」という社会認識を前提にしている。しかしながら、イデオロギーとしてはともかく、実態において、このような分離はどの程度見られるのだろうか。つまり、両領域の区別はそれほど明確なのだろうか。このような、より根本的な問いが問われた。そしてその結果、公共領域と家内領域の境界は、様々な社会的行為者の間の抗争と交渉の中で、歴史的・社会的に絶えず構築・再構築され続けている、常に曖昧で流動的なものであることが明らかにされてきた。そして、その境界の定義を他者に受け入れさせることにおいて、力のある行為者とそうでない行為者という社会的権力の差が存在することも認められるようになった。このように、公共領域と家内領域の境界が本来曖昧なものであり、家事は様々な領域、様々な社会関係で行なわれているのならば、家事に関する女性の経験は（そして男性の経験も）、多様であり、先の「家内領域において、家族のために、女性が行なう無償の、労働力再生産のための労働」という定義ではとらえきれないことになる。この多様性をとらえるための、別のアプローチが必要になる。以下では、第1、第2の批判の内容を、順に詳しく見ていこう。

（5-1）第1の批判—「家事使用人」の存在

はじめに、第1の批判、つまり、一部の人にもみ当てはまる家事概念をすべての女性に普遍的なものとして理論化したという批判は、エスニック・マイノリティのフェミニストやフェミニストの家族史研究者から起こった。欧米の旧植民地宗主国におけるエスニック・マイノリティの女性や、エスニック・マジョリティではあるが労働者階級出身の女性にとって、家事使用人としての経験は、決して見過ごすことができないほど大きな比重を占める。そしてそれは同時に、家事使用人の主な雇い主である白人中産階級の女・男にとっての家事の経験をも既定している。ここではおもに、イギリスとアメリカにおける研究を見ていこう。

19世紀半ばから20世紀初めにかけて、家事使用人を雇うことは、中産階級のライフスタイルを維持するために不可欠のことだった。19世紀を通じて、産業資本主義の発展とともに、土地所有からではなく産業資本から生まれる富を基盤にした新しい階級、産業資本家階級（ブルジョアジー）が形成されていった。中産階級とは、19世紀中期頃までは、おもに産業資本家に上級専門職（法廷弁護士など）を加えた人びとを意味していた¹⁰。これらの人々は、経済的力を得た次には政治的力や社会的威信をも得ることをめざして参政権獲得運動などを展開し、徐々にそれを得ていった（ただし男性のみ）。しかし労働者階級の市民権がまだ認められていなかった（あるいはやっと認められ始めた）この時期においては、中産階級に属することは、実態としての経済的豊かさを意味するだけでなく、参政権を持ち自分の運命を自分で決めることのできる「一人前の市民」であることをも意味していたのである。中産階級を自認する人々あるいはそれを目指す人々は、自らの階級的地位を示す方法として、さらには労働者階級や貴族階級に対する中産階級というグループの本質的優位性を示す方法として、家柄や称号を用いることはできなかった。そこでその代わりに、ある種のライフスタイルによってそれを示そうとした。それは、郊外に建てられた清潔で心地よくかつ装飾的に整えられた大きな邸宅、一皿ずつ出される手の込んだ料理、このような家内領域の中心である妻や娘は、家庭という天国における天使にたとえられ、（より下の階級の女性とは異なり）生活のための労働はしない、といったライフスタイルである。家内領域を、金銭や権力闘争といった「悪」にまみれた公共領域から空間的・象徴的に遠ざけることが、熱心に求められた。妻や子どもたちが住む住居を、工場やオフィスから離し郊外に建てることは、このような象徴的意味があったのである。このような「清く、正しく、美しい」家内領域を持っていることが、中産階級の倫理的・道徳的優位性を示すものだと考えられた。19世紀を通じて、彼らは家庭における上のようなライフスタイルのコードを複雑化していき、それは19世紀の後半から20世紀の初めにその頂点に達した（Davidoff, 1995 [1974]）（Davidoff, 1995 [1976] a）（Davidoff and Hall, 1994 [1987]）。後の歴史家は、これを家内性崇拜（the cult of domesticity）と呼ぶ（Welter, 1966 = 1986）。

しかしながら、このような中産階級の家庭におけるライフスタイルには矛盾が存在する。先ほど述べたように、家庭は女性の領域であり、それを清潔に居心地良く整えるためには、肉体労働、それも汚れや悪臭と格闘する不潔な労働が不可欠である。家庭電化製品はいうに及ばず、水道、ガス、電気といった社会基盤が整っていない当時においては、そのための労働は現在からは想像もできないほど過酷な、汚れにまみれたものだったであろう。しかしその一方で、妻や娘に求められた中産階級バージョンの女性としての徳においては、

家事はどのようにとらえられてきたか？—「公共／家内領域の分離」という社会認識との関連から（大和）

精神性や洗練が強調され、不潔さや肉体性は忌避された。中産階級であることを社会的にも、また自らに対しても表示するためには、そのような過酷で不潔な家事労働が不可欠であったにも関わらず、それを自ら行ってはならなかったのである。多くの中産階級の女性は、このような現実的でない女らしさのイデオロギーに異議申立てをするという方法によって、この相反する要求の矛盾を解決しようとはしなかった。そうではなく、家事使用人を雇うという方法によって、これを解決したのである。家事使用人にそれらの過酷で不潔な肉体労働を肩代わりさせることにより、中産階級の妻や娘たちはそれらから解放され、しかも家庭は整えられ、中産階級の目指すライフスタイルが可能になったのである（Davidoff, 1995 [1974]）（Davidoff, 1995 [1979]）。

しかしながら、家事使用人の労働に依存しなければならないことは、中産階級の人々にとって矛盾に満ちた経験だった。第1に、中産階級の人々は「公共／家内領域の分離」や「家内性崇拜」といったイデオロギーの熱狂的な信奉者であった。しかしながら、家庭内に家族以外の人物が使用人＝賃労働者として存在するということは、このイデオロギーとの間に微妙な齟齬を生じる。第2に、中産階級は「（自己の勤勉による）自立・独立」という価値を重視した。「自立・独立」は、他者の労働に依存している貴族階級に対して中産階級が自らの優越性を主張するための、いわば「存在証明」だった。にもかかわらず、家事使用人の労働に依存しなければ中産階級としての体面を保てないということを認めることは、自らの存在証明を失うことになる。このような矛盾に直面して、中産階級の雇い主は様々なやり方で、この状況をコントロールしようとした。

たとえば雇い主は、一方で、家事使用人を単なる被雇用者ではなく「家族の一人」と主張した（この主張は、家事使用人の労働を24時間コントロールすることにも役だった）。そしてたしかに家事使用人は、雇い主の家族に対して、シーツの取り替え、着替えや入浴の手伝いなど「他人」というカテゴリーとは不釣り合いな肉体的親密さを要求される仕事を行なった。しかしその一方で、食事は雇い主の家族とは別の部屋で別の内容のものを取る、雇い主とは明らかに異なる服装をする（たとえば制服など）、家事使用人ができるだけ家族や客の目に触れないように時間や場所を選んで仕事をさせる、家事使用人のほうから雇い主とその家族に話しかけることを禁じる、偶然廊下などで出くわした時は家事使用人は壁際に寄り壁の方に顔を向けて雇い主やその家族と目を合わさないようにする等々といった決まりを、雇い主は作った。そして、雇い主と家事使用人との、階級やエスニシティの上での距離が近ければ近いほど、これらの儀礼は厳格化された（Davidoff, 1995 [1974]）（Davidoff, et al., 1999c）（河村, 1982）。これらは、家事使用人を家内領域において不可視化

する、あるいは家事使用人と雇い主家族とを区別し、しかもその上下関係を明らかにするための儀礼だといえよう。一方、家事使用人も様々な戦略を用いて自分自身あるいは自分の労働を社会的に可視化し、その価値を主張しようとしたと思われる (McClintock, 1995)。ただし、この定義においてより力があったのは、雇い主の方であった。

このようにして、家事使用人（の労働）は不可視化されつつも、中産階級のライフスタイルを実質的に再生産していった。そればかりでなく、家内領域における日々の儀礼を通じて、自分がどのような社会的グループ（つまり、中産階級／労働者階級、あるいはエスニック・マジョリティ／マイノリティ）に属しているのかに関するアイデンティティも、形成・維持されていったのである。

それでは家事使用人として雇われる、あるいは雇うという経験は、当時の人々にとってどの程度一般的だったのか。また誰が家事使用人を雇い、誰が家事使用人として雇われていたのか。イギリスでは19世紀半ばから第2次世界大戦まで、ほぼすべての貴族階級と中産階級の家族、そして労働者階級の家族においてもその一部は、家事使用人を雇っていた。家事使用人は、19世紀半ばから第2次大戦直前まで、女性の雇用労働の中で最も多い職業だった (Davidoff, et al., 1999c) (Higgs, 1986)。ロンドンでは、1861年に、全雇用女性の55%が個人を相手にするサービス (personal service) の仕事についており、その大多数が家事使用人であった。1931年まで下ってもなお、イギリスの全雇用女性のうち1/4が家事使用人として雇用されていた (Graham, 1985)。19世紀の半ばから20世紀のはじめまで、労働者階級の女性の多くは、その生涯のいずれかの時期に、家事使用人として雇われた経験を持っていた。つまりこの期間、人口の多くが、自分自身や自分の家族が家事使用人として働くか、あるいは家事使用人のいる家庭で生活するかどちらかの経験を持っていたことになる。イギリスでは、国内の労働者階級や白人移民（アイルランド系、のちにイタリア系も）が家事使用人の多くを占めていた (Graham, 1991)。

それに対してアメリカでは、北東部都市地域においては白人移民女性が多いが、後進地域であった南部、南西部、西部とハワイなどでは、有色移民女性が家事使用人の大部分を占めていた。南部では、ほぼすべての中産階級の家庭において、少なくとも一人のアフリカ系女性を家事使用人として雇っていた。また第一次大戦まで、アフリカ系女性の非農業雇用労働者の90%が家事使用人として雇用されていた。南西部について見ると、エル・パソでは、20世紀の初め、ほぼすべてのアングロ・アメリカ系の家族が1人以上の家事使用人を雇っており、メキシコ系女性の労働人口の半分近くが家事使用人か洗濯女として雇用されていた。同じく南西部のデンバーでは、全世界の半分が少なくとも一人の家事使用人

家事はどのようにとらえられてきたか？—「公共／家内領域の分離」という社会認識との関連から（大和）

を雇っていた。西部については、カリフォルニアでは1880年代年まで、またハワイでは1920年代まで、女性移民に対する制限があったため男性の家事使用人が一般的であり、それは中国系と日系の男性であった。ハワイでは、白人植民者階級と非白人植民地労働者階級という社会分割があり、前者はその特権的な地位を示すため1人以上の中国系か日系の使用人を雇うことを、コミュニティの同じ階級の人々から求められていた。これらの地域で女性の移民が許可されるようになると、家事使用人の仕事は男性から女性にとって替わられ、第2次大戦前のサンフランシスコ湾沿岸地域とホノルルでは、全日系女性の半分近くが家事使用人か洗濯女として働いていた（Glenn, 1992）。

しかし20世紀にはいると、製造職・事務職・販売職などの職業が女性に開かれ、国内の労働者階級の女性や、白人移民の女性たちは徐々にこれらの職業に就くようになった。有色エスニック・マイノリティの女性たちもこれらの仕事に就くことを望んだ。しかし、市民権の弱さ、有色エスニック・マイノリティは家事使用人に向いているという「人種」的ステレオタイプなどのために、有色エスニック・マイノリティの女性を家事使用人の職にとどめておくことは、白人の移民女性に対して同様のことをするよりずっと容易だった。そして、家事使用人を確保し続けたいという要求を背景に、有色エスニック・マイノリティの女性が家事使用人の職に就くことを強制するよう、白人中産階級が行動した例は多く存在する。たとえばアメリカにおいては、1880年代にエル・パソの教育委員会が、人種分離的な教育制度を設立し、メキシコ系の子どもたちに対してはマニュアル労働と家事におけるスキルに重点をおいた教育を行ない、これは1910年代まで続いた。また大恐慌期の失業者に対する雇用援助政策において、メキシコ系やアフリカ系の女性には、家事使用人の職を他の選択肢を閉ざして割り振ることが行なわれた。さらに第2次大戦中、日系の女性に対し、強制収容所を出るための条件として、家事使用人職に就くことを強制するといったことが行なわれた（Glenn, 1985）。またイギリスにおいても、移民に対する労働許可は、家事使用人や、のちには病院やホテルにおける家事的なサービスにつく人に優先的に与えられた（Graham, 1991）。その結果、20世紀が進むにつれて、家事使用人という仕事は、多くが有色エスニック・マイノリティの女性によって占められることとなった。

20世紀の後半になると、製造職、事務職、販売職など女性の雇用機会はさらに拡大した。また水道・ガス・電気などの整備、家庭電化製品の大量生産と普及、出生児数の減少に伴う世帯規模の縮小などにより、家事労働はかつてと比べてずっと楽で清潔なものになった。このような変化によって、個人の家庭における家事使用人は減少し、階級・エスニシティにかかわらず家事は家族の女性が行なうという、我々になじみ深い家事のジェンダー間

分業が広く見られるようになった。それと同時に、かつて家庭内で行なわれていた再生産労働のいくつかは、社会化され家庭の外で行なわれるようになった。たとえば医療や介護、洋服などの既製品の製造、調理済・半調理済食品の製造、外食産業などである (Glucksmann, 1990)。これら家庭の外における再生産労働においては、階級的・エスニシテ的な分業が見られる。たとえば病院などにおいては、エスニック・マイノリティの女性は非熟練職である付き添い人や清掃などの仕事に就き、白人女性は看護婦などの準専門職・熟練職に就く。そしてそのさらに上に、専門職 (医者など) や管理職があり、この多くは男性中産階級の人々が占めるというように (Glenn, 1992)。

さらにイギリスでの研究によると、1980年代になると、共働きの中産階級の家庭で、ベビー・シッターや掃除サービスを雇うことが増え始めているという。これらの仕事に就いているのは、労働者階級やエスニック・マイノリティの女性が多い。つまり、家内領域における家事の階級間・エスニシティ間分業が再び現れているのである (Gregson and Lowe, 1994)。家内領域における家事が、階級やエスニシティの異なる女性の間で分業されるといふ事態は、決して過去のものではないのである。

(5-2) 労働者階級やエスニック・マイノリティの女性にとっての「家事」

以上見てきたような家事使用人の存在は、家事に対する人々の経験を、どのように異なるものにしたのか。まず第1に、先に述べたように、雇い主である中産階級の女性たちは家庭における家事という肉体労働から解放され、一方、家事使用人である労働者階級やエスニック・マイノリティの女性は、雇い主の家庭においてそれを担った。

第2に、雇い主に代表される支配グループのイデオロギーと実践においては、白人中産階級の女性に対しては、女性として家内性や妻・母としての役割 (ただしそれは汚れを扱う重労働である家事を直接行なうという意味ではない) が強調された。また白人労働者階級の女性に対しても、自民族の再生産の確保という観点から、妻・母役割はある程度強調された。しかしエスニック・マイノリティの女性に対しては、これと同じ意味での家内性や妻・母役割は否定され、まず求められたのは、労働者としての役割であった。エスニック・マイノリティの女性に家内性が求められたとすれば、それは自分の家庭における家内性ではなく、雇い主の家庭において家事をするという意味での家内性であった (Carby, 1997 [1982]) (Glenn, 1992) (Romero, 1997)。たとえば次のような1912年の報告がある。あるアフリカ系の女性は家事使用人として、女主人の4人の子どもの面倒を見るため、1日14~16時間働いていた。しかし、自宅に帰り自分の子どもに会うことが許されるのは2

家事はどのようにとらえられてきたか？—「公共／家内領域の分離」という社会認識との関連から（大和）

週間に1度、日曜の午後だけであり、しかもその夜自宅に泊まることも許されなかった。その間の子どもの世話は、夫や親族などが行っていた。彼女はたまに通りで自分の子どもに会うことがあったが、それは彼女が雇い主の子どもを散歩させている時であった。また、次のような例もある。1930年代のアメリカにおいて、女性の社会改良主義者のグループが、住み込みの家事使用人の労働時間や労働基準を自主規制しようとした時、雇い主の主婦たちは、主婦の家事責任は時間制限がないので、それを助ける家事使用人の労働時間に厳格な制限を設けることはできないという理由で、労働時間の規制に反対した（Glenn, 1992）。

ただしこれはあくまで支配グループにおけるイデオロギーであり、エスニック・マイノリティの女性が、この状況に対して自ら形成した対抗的アイデンティティの核は、母としてのそれであった。グレン（Glenn, Evelyn Nakano）によると、家事使用人の言説における最も普遍的な主題は、自分がこうやって家事使用人として働いているのは、自分の娘が同じ道を歩まずにすむようにするためであるというものである（Glenn, 1992）。

第3に、家事使用人の管理は雇い主家族の主婦の仕事であったので、家事時間、家事の水準、やり方などをめぐる対立は、女性どうしの中の「人種」的・階級的対立として表れ、中産階級の男・女間の対立としては回避された。すなわち中産階級の男性は、今日のように妻から家事の分担を求められたり、自分に対するサービスの質を下げることを承認させられることはなかったのである。そのような夫婦間の家事サービスの提供と享受をめぐる利害の対立は、女性どうしである主婦と家事使用人の間の対立に転化されたのである（Glenn, 1992）。

（5-3）白人中産階級女性中心の「家事概念」に対する異議申し立て

このような労働者階級やエスニック・マイノリティの女性の、家事使用人としての経験は、「家内領域において、家族のために、女性が行なう無償の、労働力再生産のための労働」という家事概念にどのような見直しを迫るであろうか。

第1に、家事使用人たちの家事の経験は、「家内領域において」という概念には当てはまらない。彼女らは家事を、雇い主にとっての家内領域で行ったのであり、これは彼女ら自身にとっての家内領域ではない。したがって、家事が行なわれる場という観点から見ると、労働者階級やエスニック・マイノリティの女性にとって、「公共／家内領域の分離」は、白人中産階級の女性ほどには明確な形をとっては現れなかったといえる。これと関連して、「家内性」は女らしさを表象するものとして、白人女性には強調されたが（中産階

級に対しては強く、労働者階級に対してもある程度強調された)、エスニック・マイノリティの女性には否定され、むしろ外で働く労働者としての役割が強調された。したがって「家内性」という女性の特質も、労働者階級やエスニック・マイノリティの女性にとっては、白人中産階級の女性ほどには自明のものではなかったのである。

第2に、「家族のために(行なう)」という家事概念も当てはまらない。家事使用人たちはたしかに家事を行ってきたが、それは自分の家族に対してだけではなく、それよりも雇い主である白人中産階級の家族に対する家事の方が優先された。

したがって第3に、「無償の」も当てはまらない。家事使用人としての家事は、たとえそれがどんなに低賃金で現物支給の割合が多くても、有償労働として行なわれたからである。

第4に、家事は「女性が行なう」という概念も、これだけでは単純過ぎる。たしかに、今まで見てきた家事を労働ととらえる研究において、家事の分業に関して最も問題視されたのは、女性が行なう／男性は享受するというジェンダー間の分業であった。特に、ハートマンらマルクス主義フェミニストによる家事労働概念は、労働者階級の家族内において、労働者階級の女性が、労働者階級の男性と子どもに対して家事を行なうという、同一階級内・同一家族内におけるジェンダー間の分業という側面に注目したものである。しかしながら、家事使用人についての研究から明らかになったのは、彼女らにとって家事の経験として大きな比重を占めるのは、彼女らが、階級やエスニシティが異なる人々(主として白人中産階級の男性・女性・子ども)に対して家事を行なうという経験であった。つまり、家族の境界を越えて、異なる階級間、エスニック・グループ間にまたがる労働力再生産関係が存在することが明らかになったのである。

このような家事の分業においては、家事をめぐる対立も、家族内のジェンダー間の対立より、雇い主である白人中産階級女性と家事使用人との間の階級的・「人種」的対立としてより強く経験された。もちろん家族内のジェンダー間の対立が無かったわけではない。しかし、エスニック・マイノリティのフェミニストの議論によると、エスニック・マイノリティの女性は、より広い社会における「人種」的抑圧の方がさらに強かったために、家族を抑圧の場としてよりも、「人種」的抑圧に対する抵抗の場として経験していたという(Carby, 1997 [1982]) (Glenn, 1985)。同様に、雇い主である中産階級の男・女にとっても、家事をめぐる夫婦間(ジェンダー間)の対立は抑制され、家事使用人と主婦との対立に転化された。このことから、家事に関する分業やそれにとまなう葛藤がどのような分割線で起きるのかは、家族を越えたより広い社会における分業や不平等の構造によって決定され

家事はどのようにとらえられてきたか？—「公共／家内領域の分離」という社会認識との関連から（大和）

ているといえる（Glenn, 1985）。つまり、家事が階級間分業あるいはエスニシティ間分業として組織されている社会においては、その間の対立が顕在化し、一方家事が個々の家族内でジェンダー間分業として組織されている社会では、ジェンダー間の対立が顕在化するのである。

第5に、家事を「労働力再生産のための」労働としてのみとらえることも、問題をはらんでいる。なぜならば家事使用人による家事は、労働力の再生産という面だけではなく、家事をする人とそれを享受する人の双方における、社会関係やアイデンティティ（ジェンダー、階級、エスニシティなどに関する）を再生産したという面でも、重要だからである。たしかに以前から、家事が社会関係やアイデンティティ（ジェンダーや階級に関する）を再生産することについては、すでに多くの研究者によって指摘されてきた（Berk, 1985）（Chodorow, 1978=1981）（Hochschild, 1989=1990）（Secombe, 1974）（Sharpe, 1972）。しかしこれら既存の研究は、女性が自分の家庭において、自分と同じ階級の男性や子どもに対して家事を行なうということをその理論的前提にしている。それに対して、家事使用人についての研究は、異なる階級間、異なるエスニック・グループ間にまたがって家事が行なわれることに注目し、それが様々なアイデンティティや社会関係を形成する側面があることに光を当てた。たとえば先に見たように、エスニック・マイノリティを家事使用人として雇うことを白人コミュニティの規範とすることによって、白人としてのアイデンティティと、白人支配の社会関係を再生産することができた。家事使用人に制服を着せる、家事使用人のほうから雇い主とその家族に話しかけることを禁じるといった細かな決まりは、両グループの境界を日々に見える形づくりあげ、その上下関係をディスプレイするための儀礼として不可欠なものだった。また中産階級のよく整った家庭生活は、中産階級のアイデンティティを支えていたが、これも家事使用人の労働によって初めて可能だったのである。伝統的マルクス主義の考え方によると、階級関係や階級アイデンティティは公共領域における生産の場において形成されるとされてきた。それに対して家事使用人とその雇い主家族に関する研究は、家内領域もこれらが形成される重要な場であることを示した。

これに関連して、家事使用人の意味について、「家事使用人の雇用は、中産階級の誇示的消費の1つであった」「家事使用人は中産階級のステイタス・シンボルであった」という議論（Banks, 1954）（Davidson, 1982）（McBride, 1976）がある。これについて検討したい。たしかに中産階級を自認（あるいはめざす）人々が、他の消費支出を削ってでも家事使用人を雇おうとした例は数多く存在する（Horn, 1997 [1975]）。しかしこの議論を無批

判に受け入れることは、家事使用人の労働を不可視化することにつながるのではないだろうか。なぜならばこの議論は、「中産階級というものが自律的に（つまり家事使用人の力を借りずに）まず成立し、成立後にそれを表示するために、家事使用人を、あまり実質的な用をなさない飾りとして雇った」というイメージを喚起するからである。たしかに中産階級の人々はこのような自己イメージを持つことを好んだであろう。しかし先に述べたように、中産階級のライフスタイルやそれに基づくアイデンティティは、家事使用人なしに成立したわけではない。それがそもそも成立するためには、家事使用人の物質的あるいは象徴的労働による支えが必要不可欠だったのである。したがって、家事使用人はステータス・シンボルといったような空虚な飾り物ではなく、中産階級が存在し得るための隠された土台であったといえる。しかしこのように、自分たち中産階級の存在基盤が、より下の階級に「依存」しているということを認めることは、中産階級の存在証明である「独立」という価値を危うくする。それを避けるために、家事使用人の労働に依存しているという事実は隠されなければならなかった。そう考えると、「家事使用人はステータス・シンボル」という議論は、一方で家事使用人の労働を不可視化・無効化し、もう一方で中産階級の「自立」「独立」という虚構をつくりあげる、イデオロギー装置でもあるのである（Yamato, 1998）。

最後に、アイデンティティに関してつけ加えるならば、ジェンダー・アイデンティティは、エスニック・アイデンティティや階級アイデンティティと独立に存在するのではない。たとえば女性としてのアイデンティティは、白人中産階級においては汚い家事をしないことと結びついている。それに対して、エスニック・マイノリティや労働者階級における女性としてのアイデンティティは、そのような家事を自らが行うことと結びついている。つまり、女性としての経験は、エスニシティや階級によって異なっており、したがって女性としてのアイデンティティも、エスニシティや階級によって異なったものとして形成されることも忘れてはならないのである¹¹⁾。

（5-4）第1の批判の要約

要約すると、家事使用人についての研究は、家事労働概念の発展における第2、第3段階で確立され、今日でもまだ広く受け入れられている「家内領域において、家族のために、女性が行なう無償の、労働力再生産のための労働」という家事概念に、修正を迫った。そして、家事に対する女性の経験は1つではなく、階級やエスニシティによって異なること、家事は、様々な領域において、様々な社会関係のもとで、そして様々な報酬をと

家事はどのようにとらえられてきたか?—「公共／家内領域の分離」という社会認識との関連から (大和)

もなって (あるいは無報酬で) 行なわれていること、そして、異なる家族間、階級間、エスニック・グループ間にまたがって行なわれる家事が存在することなどを明らかにした。そしてこのような家事をめぐる社会関係は、人々のアイデンティティ (ジェンダー・階級・エスニシティなどが複合した) の形成に大きな影響を及ぼしていることを指摘した。次に2つめの批判について見ていこう。

(5-5) 第2の批判—社会的に構成されるものとしての「公共／家内領域の分離」

「家内領域において、家族のために、女性が行なう無償の、労働力再生産のための労働」という家事概念に対する第2の批判は、この概念が「公共／家内領域の分離」を無批判に前提していることに対して行なわれた。では、両領域の分離を前提することの何が問題なのだろうか。それは、そうすることによって、両領域の境界やその内容についての現行の定義を自明化・自然化する結果をもたらすからである。しかし実際には、公共／家内領域の境界は社会的・歴史的構成物であり、公共領域が何を意味し家内領域が何を意味するのかという定義をめぐる、様々な社会的勢力・社会的行為者が抗争と交渉を繰り返している。その定義は流動的で曖昧であり、しかもその定義を下すことにおいて力のある行為者とならない行為者が存在する。このことについて、ヨーロッパ (近代以降についてはおもにイギリス) の例を見ていこう。

まず古代ギリシャの都市国家においては、身体の再生産に関することはもちろん、労働による生活物資の生産全般に関することは、家政すなわち家内領域に属することであり、公共的なこととは考えられていなかった。公共領域とは国家の政治や戦争に関することの領域であったのである。また、公共領域のメンバーシップを持っているのは家長である男性自由民のみであり、一方家内領域とは、女性自由民や奴隷 (男女に関わらず) の領域と考えられていた (Habermas, 1990 [1962] = 1994)。

中世の封建社会になると、このような分離された2つの領域としての公共領域と家内領域は、社会的実態としては存在しなくなる。しかし中世にはこれとは別の「公なるもの」の概念が存在した。それは「支配権の公的表現」とよぶことができるものである。すなわち、領主など何らかの程度において「高位」の地位を保有している者は、その権力を具現するものとして、人々の前に姿をあらわし、印綬・武具・衣装・髪型・様式化された挙措や話法など、要するに「高貴な」態度と作法によってその支配権を表現した。この作法のコードは中世をつうじて洗練され、宮廷的な徳の体系として結晶化していった。そしてこのコードを自由に操ることのできる人々が集う宮廷での社交生活の圏が、「公なるもの」と見な

された。時代が進み、初期資本主義の絶対王制のもとで地方封建領主の支配権が弱まると、この公共性は国王の宮廷に集中する (Habermas, 1990 [1962] = 1994)。

しかし同時にこの絶対王制の時代には、新しい公共領域の意味が生まれはじめる。それは、支配者個人 (絶対君主) から客体化された「国家そのもの」に関連した領域という意味の公共領域である。この新しい意味においては、公人とは国家の官職を持つ者であり、これに対して私人とは、いかなる公的官職をも占めていないがゆえに公権力への参与から締め出されている者という意味である (Habermas, 1990 [1962] = 1994)。

このような新しい国家の発展と、それにとまなう封建制的生産関係の衰退は、各家族の経済活動を私有化し、私生活の圏としての家内領域が設定される。しかしその一方で、私的経済活動 (ビジネス) が営まれるための経済的諸条件は、各自の家政という範囲を越えて、公共的な関心事になってくる。たとえば絶対王制下の重商主義のもとで、大規模な遠隔地貿易が広まっていくと、貿易のリスク管理のために、政治 (外交) と軍事による国家の保護が必要とされる。また工業の経営においても、市場の範囲が地域を越えて領土的国家の範囲にまで、あるいはそれを越えて海外市場にまで広がると、私的経済活動といえども国家による統制や保護を受けた流通システムのもとに展開されざるを得ない。また自給経済が縮小し、市場の範囲が地域市場を越えて広がると、人々は消費者として、毎日の生活において重商主義的諸施策の影響を受けることになる。つまりこの新しい状況は、一方では、公権力から家内領域を判然と区別しながら、他方では、私的経済活動を個々の家内領域を越えた公共的関心事へ引き上げたのである (Habermas, 1990 [1962] = 1994)。

このような新しい状況の中で、旧来の支配者層である貴族層は、政治や国家に関することという伝統的なやり方で公共領域の内容を定義した。またそのメンバーシップを宮廷に関わっていること、あるいは国家の官職を持っていることという方法で定義し、官職を貴族層内部に閉鎖しようとした。それに対して新興の産業資本家たちは、私的経済活動 (ビジネス) に関することをも公共領域の内容に含めようとした。そしてそれらに関しての公的意思決定に自分たちの利害が反映するように、自分たち中産階級にも公共領域に参加できる権利、つまり参政権を求めた。このような階級間の公共領域の定義をめぐる抗争と交渉の結果、中産階級は参政権を得て、公共領域に参加することができるようになったのである。そして中産階級の力が増すにしたがって、「ビジネスに関することは公共領域に含まれる」という彼らの定義が、社会的に広まっていった (Hall, 1992 [1985])。それと同時に、新聞などのマス・メディア、喫茶店、読書クラブなど中産階級が自分たちの意見を表明するためにつくり上げた諸制度も、公共領域における地位を獲得していった

家事はどのようにとらえられてきたか?—「公共／家内領域の分離」という社会認識との関連から（大和）

（Habermas, 1990 [1962] = 1994）。

しかしながら、この新たに定義された公共領域には、労働者階級、エスニック・マイノリティ、女性（階級やエスニシティに関わらず）などは参加資格がなかった（したがって、労働組合なども公共領域に属する機関とは見なされなかった）。これらの人々は財産が無いために、あるいは知的に劣っているために自律的・理性的な判断ができず、上位者の判断に依存するべき存在、したがって自立した個人から構成される公共領域には参加できない存在と、中産階級（特に男性）から見られていたのである（Hall, 1994）。このような中産階級の男性による公共領域の定義に対して、労働者階級、女性、エスニック・マイノリティはそれぞれ別の定義を主張し、公共領域への参加を求めていくのである。労働者階級およびその支援者たちがどのような定義を主張したかについては、後に詳しく見る。ここで強調しておきたいのは、彼らの提案した新たな定義も、公共領域への参加資格を「理性的であること」「家族を養えるほどの収入があること」など「男らしさ」に結びつけるものであったということである（Hall, 1992 [1986]）。したがって、労働者階級の男性が公共領域のメンバーシップを得たことによってさらに、公共領域と「男らしさ」の結びつきは強まり、女性のそこへの参加は難しくなったともいえるのである。

女性も公共領域への参加を求めて抗争・交渉を重ねた結果、今日では参政権をはじめとした公共領域へのメンバーシップを得たことになっている。しかしながら女性が政治やビジネスの世界に進出すること、そしてそこで男性と同じ扱いを要求することには根強い抵抗がある（Fraser, 1997）。このことは、公共領域とは、「誰でもがアクセスできる領域」であるとされる一方で、「男性にふさわしい領域」という定義が今日でも根強いことを示している。女性は公共領域に男性と同じ資格で参加できるのか。公共領域とはジェンダーに関して中立的な領域なのか、それともあくまで男性にふさわしい領域なのか。このような定義をめぐる交渉は、今日も続いている。同じような交渉は、エスニシティに関しても行なわれている。このように公共／家内領域の境界は常に曖昧で流動的であり、その定義をめぐる様々な社会的行為者間の抗争や交渉が進行中なのである。

（5-6）「公共／家内領域の分離」の実態

今まで見てきたように、家事についての概念は、この「公共／家内領域の分離」という社会認識と深く結びついている。家事の歴史的变化についての通常理解は、「産業化より前には、ほぼすべての労働が家内領域で行なわれていたが、産業化とともに、多くの労働は、市場での交換のための労働として公共領域において組織されるようになり、家内領

域には、自家消費のための物的生産やサービスが家事として残った」というものである。しかしながら実際には、両領域の分離はそれほど明確なものではなく、社会の各層によって異なっている。

まず市場労働に注目すると、たとえば一方で、今まで家内領域では行なわれたことがほとんどなく、今後も行なわれることがないであろう市場労働（たとえば鉱山での労働、海運関係の労働、軍隊での勤務など）が存在し、もう一方で、今日でも家内領域で行なわれている市場労働（たとえば自宅と店舗が併設されている小規模商店や、開業医など）が存在する。後者においては、多くの場合、家族メンバー（特に妻）は重要な市場労働力である。これら両極の間に位置する多くの労働は、たしかに産業化にともなってもらいに家内領域から分離していき、職場で行なわれるようになっていった（Hall, 1992 [1982]）。しかしその変化は非常に緩慢であり、第2次世界大戦前までは多くの男女が自営的職業に就いて、世帯内で市場労働を行っていた（Davidoff, et al., 1999a）（Geib-Gunderson, 1998）。

また、産業化の初期である18世紀半ば～19世紀半ばにおいては、世帯内で行なわれる市場向けの生産が強化されるという逆の動きも存在する。たとえばこの時期に広く行なわれていた問屋制工業は、世帯での生産を基盤にしていたため、家内領域における市場労働を強化した。織物関連の仕事においても、ジェニー紡績機やミュール紡績機は家内生産用であったため、家内生産を強化した。またアークライトの水力紡績機は、大規模な工場生産用であったが、準備工程のための手作業を必要とし、これは女性の家内労働に頼っていた。最後に蒸気機関を利用した紡績機が出現すると、世帯内で家族を単位にした生産方法は、これとの競争に負け、生産は徐々に工場に移っていった（Oakley, 1990 [1974] = 1986）。しかし先に述べたように、今日でも家内領域において市場労働が行なわれている世帯も存在する。また情報技術の進展により、いわゆるSOHO（small office, home office）のように、それまで職場で行なわれていた市場労働が家内領域に逆戻りする現象さえ見られる（塩沢, 1995）。

次に、家事労働の側面から見ても、「公共／家内領域の分離」というモデルは、実態をうまく説明しない。これを最も鮮明に表している歴史的事例が、家事使用人の存在である。先に見たように、家事使用人による家事は、雇い主から見ればたしかに家内領域で行なわれているが、家事使用人から見れば、家内領域で行なわれているとはいいがたい。家事使用人は、「公共／家内領域の分離」という支配的な社会観にうまく位置づけられない、そのために支配的な社会観を脅かす、境界的な存在だったのである。先に見た、雇い主家族が家事使用人に強制した様々な儀礼も、この曖昧さを一時的にはあれ管理し確定しよう

家事はどのようにとらえられてきたか？—「公共／家内領域の分離」という社会認識との関連から（大和）

とする試みだと理解することができる。

また、家事使用人を雇っていない世帯に目を転じて、「家事は家内領域において家族関係にある人が行なう」とは必ずしもいえない。たとえばイギリスで、戦間期頃の労働者階級の世帯における家事についておこなわれた調査研究（Glucksmann, 1995a）によると、妻たちは様々な方法で家事を処理していた。その方法を大まかに分けると、1つは世帯内における他のメンバー（おもに夫）との分担、2つめは家事代替商品（出来合いの食品など）の購入、そして3つめは親族や近隣の女性による家事サービス（洗濯や子守りなど）を利用することであった。そしてこれら3つのうちどれを多く利用するかに関しては、労働者階級の中においても、差が見られた。調査対象となった労働者階級の女性は、ほとんどが何らかの収入を得るための労働についていた。そのうち、繊維産業などにおいて正規労働者として働いていた女性を見ると、彼女たちの賃金は比較的高く安定しており、夫のそれと比べても見劣りするものではなかった。彼女たちの多くは、先ほど述べた3つの方法のうち、2つか3つを用いて家事を処理していた。そして、近隣の女性による家事サービスはもちろん、親族（母や姉妹など）によるそれを利用した場合も、その報酬を現金によって支払うことが多かった。それに対して、同じ労働者階級でも正規労働に就かず、臨時雇いの労働（洗濯の請け負い、掃除婦、パブで働くなど）をいくつか掛け持ちで行なっている女性の場合、彼女らの労働時間の合計は正規労働者と同じかそれ以上であるにも関わらず、収入は少なく不安定であり、しかも多くの場合、夫も同様であった。このような世帯においては、家事を片付けるにあたって、夫の手伝いはあまり期待できず、既製品を購入することも行なわれていなかった。そして近隣との間の家事サービスについては、それを購入するのではなく、自分がそれを行ない金銭的報酬を得る側にまわることが多かった。そしてそのような臨時雇いの仕事をする間、子どもの世話などは自分の親族や近所の人に頼み、そしてそれと交換に、それらの人の洗濯を請け負うというような互酬的關係を結んでいた。このような例から明らかなように、第2次大戦より前においては、中産階級においても労働者階級においても、家事は世帯内・外で、様々な社会関係のもと、様々な報酬をとまって（または無報酬で）行なわれていたのである。

第2次大戦後になると、先に述べたように市場労働は公共領域で夫が行かない、家事労働は家内領域で妻が行なうという世帯内のジェンダー間分業が、階級やエスニシティの違いを越えて広がっていった。しかしイギリスでは1980年代以降、共働き中産階級の世帯において、ベビー・シッターや掃除サービスを雇うという形で、家内領域において有償の家事労働を雇用することが再び増加している。

このように、市場労働から見ても家事労働から見ても、「公共領域（＝市場労働）／家内領域（＝家事労働）の分離」は、現実にはそれほどはっきりしたものではなく、この二分法にぴったり収まりきらない多様性と曖昧さを持っている。

(5-7) イデオロギーとしての影響——女性労働の過小評価、男性労働の過大評価

しかしながらイデオロギーとしての「公共領域＝生産・労働＝男性、家内領域＝非生産・非労働＝女性」は、現実の状況がこの二分法には収まらない人々にも、等しく影響を与えた。女性に対しては、家事（自分の家族に対する）による貢献だけでなく（この点については第1段階の研究のレビューにおいて論じた）、市場労働による貢献をも見えなくさせるように働いた。男性に対しては、その市場労働による貢献を過大評価するように働いた。以下では、女性、男性の順にこのイデオロギーの影響を見ていこう。

まず女性に関しては、このイデオロギーの浸透によって、女性が職業を持つことは女らしさからの逸脱と見なされるようになり、その機会は狭まっていく（Hall, 1992 [1980]）。たとえば、かつて家内領域で行なわれていた頃には女性の仕事と見なされたこと（ビールの醸造や、医療行為など）も、それが家庭の外で職業として組織されるようになると、そのための訓練や技術を得る機会に女性は参加を許されず、それらは男性の仕事となっていく（Hall, 1992 [1980]）。にも関わらず多くの女性は、世帯内で家業、内職、洗濯の請け負いなどに従事したり、また世帯外で非正規就労や季節労働などをも含めた様々な労働を行い、収入を得る活動に従事し続けるのである。しかしながら、女性を職業ではなく家事とむすびつけ、「女の仕事」は家庭の管理や子供の養育であるとするイデオロギーは、女性が行っていた市場労働を不可視化した。その端的な例が、政府のセンサスにおける女性の扱いである。

イギリスにおいては1840年から、またアメリカにおいては1860年から、政府のセンサスにおいて、女性の職業についての統計が取られるようになった。しかしこの19世紀の半ばから20世紀の初め頃までのセンサスにおいては、女性（特に既婚で家業に従事している女性）は、無職とされ、夫の被扶養者とされる傾向が強く見られる。一例として、たとえばイギリスの研究によると、工場や病院（掃除婦として）の給与支払簿においては、労働し給与が支払われたという記録がある女性に関して、同じ年のセンサスではその同一の女性は「無職」あるいは「妻」として記録されている例が多く見られる（Higgs, 1987）。またアメリカの研究によると、1910年の農業統計では、農家世帯の88%が市場向けの鶏を飼っており、その70%の世帯で鶏の世話は女性の仕事と報告されている。また1919年に行われ

家事はどのようにとらえられてきたか?—「公共／家内領域の分離」という社会認識との関連から（大和）

た農家の女性に対する調査では、農家の妻の81%が鶏の世話に従事していると答えている。また33～60%の妻が、ミルクを絞りバターを作りそれを売る仕事に従事していると答えている。それにも関わらず、1910年のセンサスにおいては、農家の妻で職業が農業と記録されている者はわずか3.6%であり、それ以外は無職、つまり夫の被扶養者として計上されている。同様のことは、自営的製造業者の妻、小売商人の妻、開業医・開業弁護士など自営的専門職の妻などについてもいえる（Geib-Gunderson, 1998）。このように、市場労働を行っていた女性の多くが、政府の統計では無職とされているのである。

なぜこのような事が起こったのか。まず、センサスにおける職業の定義の問題がある。現代のセンサスでは、前の週に1時間以上有給で働いた場合を、職業（市場）労働をしたと見なす。しかしこの時期においては、イギリスにおいてもアメリカにおいても、世帯主に世帯メンバーの「職業」（a gainful occupation）を1つ答えさせるという方法で調査が行なわれた。この調査方法の結果、職業として答えられたものは、その人の実際の活動ではなく、その人の社会的地位やアイデンティティである傾向が強くなった。このような調査方法上の問題の上に、「公共領域＝生産・労働＝男性、家内領域＝非生産・非労働＝女性」というイデオロギーによるバイアスが重なった。その結果として、回答者（＝世帯主）においては、上に述べた方法で調査された場合、妻が家事に加えて他の仕事をしていても、妻の第一の活動として、家事や主婦業と答える人が多くなる。逆に男性の職業については、たとえ退職していても、それ以前に行っていた職業を職業と答える傾向が強くなる。さらに調査者の側のバイアスもある。当時の調査者は、先に述べたイデオロギーのもと、「女性は労働していない」という先入観を持っていた。その結果、女性の職業については、しばしば尋ねるのを忘れて無視したりするといったことが起こった。これらの結果、19世紀半ばから20世紀初めにかけてのこれらの国における女性労働力は、実際にそうであったよりは、かなり低く記録されている（Geib-Gunderson, 1998）（Higgs, 1987）。そしてこれと同じことは、現在でも起こっている（Waring, 1988＝1994）。つまり、「公共領域＝生産・労働＝男性、家内領域＝非生産・非労働＝女性」というイデオロギーは、一方で、家族の生存や一国の産業の発展に対する、女性の貢献を過小評価し、他方で、男性の貢献は過大評価するように働いた（ている）のである。

次に男性に対する影響について見てみよう。このイデオロギーは、男性稼得者（male breadwinner）型家族モデルと強く結びついており、「自分1人の労働で家族を養う」という男性像を、「政治的権利をもつ者＝一人前の男であること」の条件と結びつける考え方を強めた。たとえばイギリスでは、19世紀半ば、選挙権を労働者階級の男性にまで広げる

か否かが問題となった。選挙権拡大に反対する人々（保守的な貴族・中産階級など）は、労働者は暴動を起こすなど非理性的であるとして反対したが、労働者階級のリーダーやその支持者たち（進歩的中産階級など）は、国家のために船や鉄道を造る能力のある労働者は、理性を持ち合わせていると主張した（Hall, 1994）。つまり「理性的であること」が公共領域への参加の資格とされたのである。しかし、労働者たちの大規模な示威行動などにより、選挙権拡大やむなしという状況になると、次に、労働者階級の中で選挙権を与えるグループと与えないグループの線をどこに引くか、つまりどのような労働者階級の男性が選挙権を行使するにふさわしいかが、さかんに論じられた。そこでの議論の中心になったのは、「独立した（independent）労働者」「品位ある・尊敬に値する（respectable）労働者」という概念であった。この議論の中で、「独立」とは、「慈善などに頼らず、自分の労働で自分と家族を養うことのできる人間であること」を意味するように、また「品位ある」とは、「住む家があり、あるレベル以上の生活水準を達成していること」を意味するようになっていった。そのような男性労働者であれば、選挙権を行使し、自分たちの代表を選ぶ能力があると、支配階級も、労働者の代表者たちも論じたのである（McClelland, 1998）。その結果、1867年の選挙法改正で、選挙権を与えるめやすとされたのは、「12ヶ月以上同じ住宅（賃貸でもよい）に住んでいる男性世帯主」（Hall, 1994）である。このように、家族を養えること、そしてその家庭がこざれいに整えられていること（つまりそのための家事労働に、ある程度専念できる妻がいること）は、男性が参政権をもつ一人前の市民たるために不可欠なこととして論じられた。

また労働運動の内部においても、「男性労働者が家族を養うことができる状態を守ること」が、労働組合をはじめとする労働者団体の主要な役割と見なされた。もちろん実際には、すべての労働者がこのような状態を維持できたわけではない。たとえ一時的には達成できても、少しの景気変動により、妻や子どもも働く、あるいは慈善に頼るという状態にたやすく移行するというのが、多くの労働者家族の実態だった。そしてそのような状態に移行することは、「政治的権利を失うこと」「一人前の男でなくなること」「市民でなるなること」を意味した。だからこそ、「独立」と「品位」を維持し、男らしい男性、一人前の市民としての地位を維持することは、労働者自身からは労働者の権利と見なされ、その権利を守るために、労働者団体において団結することが必要と見なされたのである。家族賃金や労働時間の短縮をはじめとする様々な組合の要求も、この権利を守るために行なわれた（McClelland, 1998）。

このように、労働によって家族を養うことができるという男性像は、男性個人のアイデ

家事はどのようにとらえられてきたか？—「公共／家内領域の分離」という社会認識との関連から（大和）

ンティティにとっても、また選挙権獲得運動や労働組合運動の政治的レトリックにおいても、重要な要素となった。しかしながら現実には、このモデルを満たそうと思っても満たせず、実際には妻や子どもの収入を当てにせざるを得ない男性（Davidoff, et al., 1999b）、あるいはこのような責任から意図的に逃走しようとする男性（Tosh, 1998）も多く存在した。しかしながら、「公共領域＝生産・労働＝男性、家内領域＝非生産・非労働＝女性」というモデルは、そのような稼働能力における男性の多様性を見えにくくする働きをしたのである。今日でも「男は仕事」というフレーズは、その仕事から得られる収入には多様性があること（そしてその結果として、男性やその家族の生活に多様性が生まれること）に人々が気づくことを難しくするという働きをしているのではないだろうか。

すなわち、「公共領域＝生産・労働＝男性、家内領域＝非生産・非労働＝女性」というイデオロギーは、一方で、女性の家族に対する経済的貢献（家事労働も市場労働も含む）を不可視化する。そしてその一方で、男性の経済的貢献を過大評価して、実際には夫の労働と収入のみならず、妻や子どもの労働と収入があってはじめて生活できる世帯があるという事実を見えにくくしてきたのである。

（5-8）第2の批判の要約

このような「公共／家内領域の分離」という社会認識を見直す研究の貢献を、2点指摘しよう。

第1に、「公共／家内領域の分離」が歴史的・社会的構成物であり、両者の境界は常に流動的で、その定義をめぐるさまざまな社会的行為者が争っているという見方を示したことである。

第2に、「公共／家内領域の分離」に関する支配的イデオロギー（両領域の定義において最も力のある人々の持つイデオロギー）の影響を明らかにしたことである。支配的イデオロギーは、「公共領域＝生産・労働＝男性＝自立、家内領域＝非生産・非労働＝女性＝依存」という2つの領域が存在することを自明化・自然化する。このイデオロギーの影響によって、女性の労働は、家事（家族向け）はもちろん市場労働に関しても過小評価され、女性は依存者と定義づけられる傾向があった。逆に男性については、その労働は過大評価され、現実には妻や子どもの労働や収入に依存していても、男性は独立した扶養者として定義づけられる傾向にあった。家事を研究するに際しては、このイデオロギーがわれわれの認識にいかに強い影響を及ぼしているかを念頭において、行なう必要があるのである。

6. 結論——家事を見るための視点

本稿では、家事のとらえ方がどのように変化してきたかを、4つの段階に分けて見てきた。その結果明らかになったことは、第1に、「公共／家内領域の分離」という社会認識が、私たちが家事を見る見方に大きな影響を与えていることである。したがって家事を見ようとする時には、この社会認識が私たちのものの見方を呪縛する力の大きさを自覚し、この社会認識に距離を置いて見る必要がある。しかし一方で、この社会認識がイデオロギーとして、人々（研究者も含む）の生活や認識にどのような影響を与えてきたかということ自体は、興味深い研究対象になるだろう。特にこのイデオロギーが、男性のアイデンティティにどのような影響を与えてきたか、あるいは研究者が「男性」を見るときに暗黙の前提にどのように入り込んでいるかは、これまであまり注目されてこなかった。今後はこの点に注目することが必要だろう。

第2に、「公共／家内領域の分離」は、自然・自明なものではなく、社会的に構成・再構成され続けているものであるということである。したがって、「公共領域＝生産・労働＝男性、家内領域＝非生産・非労働＝女性」という社会認識を支持しているのはどのような層の人なのか、またこれとは異なる社会のイメージを持っているのはどのような層の人で、それはどんな内容のものなのかを見ていくことも必要であろう。

第3に「家内領域において、家族のために、女性が行なう無償の、労働力再生産のための労働」という家事概念は、夫婦の関係性を見るためには一定の有効性があるが、家事（人間が栄養をとり清潔と適温を保つために必要な活動）がどこで、どのように行われているかを把握するためには不十分であることがわかった。

それでは私たちは、現代社会における家事をどのようにとらえるべきだろうか。実証研究に向けての5つの視点を提案したい。第1に、家事は様々な社会関係において、しかも異なる世帯、階級、エスニック・グループにまたがって行われうる。そして、どのような社会関係で家事が行なわれるかは、より大きな社会構造（ジェンダーについての構造、階級構造、エスニック・グループ間の構造そして、国家の政策など）に依存する。

第2に、家事は、様々な労働との関連でとらえられなければならない。つまり、「公共／家内領域の分離」という社会認識を前提にし、公共領域とされる領域での活動と家内領域とされる領域での活動を別々にとらえるのではなく、家内領域において無償で行われる家事・有償で行われる家事、公共領域において市場労働として行われる家事・無償のボランティアとして行われる家事、そして家事ではない市場労働など、様々な労働の関連の

家事はどのようにとらえられてきたか？—「公共／家内領域の分離」という社会認識との関連から（大和）

中で、家事を見る必要がある。言い換えれば、「社会における労働の全体的編成」(total social organization of labour) (Glucksmann, 1995b) という枠組みのもとで、家事をとらえることが必要なのである。

第3に、人々の間には、公共／家内領域の境界の定義について、抗争や交渉が存在する。このことは、どの領域・どの社会関係で家事が行なわれるべきかについての、人々の間の定義のずれ、その結果としての抗争・交渉が存在することを意味する。

第4に、家事は労働力を再生産するだけでなく、家事をする人とそのサービスを楽しむ人の社会関係やアイデンティティを再生産する。したがって家事は、アイデンティティ（あるいは心理的側面）と労働（経済的側面）という2つの側面から同時にとらえられなければならない。

これらの視点は、分析的というよりは記述的な視点である。しかし、サービス経済化が進む現代社会において、家事はますます「売買されるサービス」になっていき、それが行なわれる社会関係はますます多様化していけよう。したがって家事をとらえるためには、「家内領域において、家族のために、女性が行なう無償の、労働力再生産労働」という家事概念や、その根底にある「公共／家内領域の分離」という社会認識を脱構築し、上のような視点をもつことが、まずは必要なのではないだろうか。

【注】

- 1) エンゲルスに対する批判は、Barrett (1985)、Beechey (1987 = 1993)、Tong (1995 [1989])などを参照。
- 2) マルクスの鍵概念が「労働」であるのに対して、パーソンズのそれは「役割」や「機能」である。このあと本文で見ると、パーソンズは「公共領域 = 経済的機能 (+ 政治的機能など)、家内領域 = パーソナリティ機能」として社会をとらえている。この「経済的機能」を「生産・労働」に、また「パーソナリティ機能」を「非生産・非労働」に置き換えると、パーソンズの社会認識の枠組みは、マルクス、エンゲルスのそれとほぼ同じとみなすことができる。
- 3) ホックシールド (Hochschild, Arlie Russell, 1983 = 2000) などによる「情緒労働」という考え方が登場する前、つまり情緒的な活動をも労働ととらえる視点が現れるより前においては、特にそうである。
- 4) 日本においても、ブラッドとウルフの研究に影響を受け、夫婦の役割関係というテー

マのもとで、家事分担の研究が行なわれてきた。これらの研究においても、その第1の関心は、夫婦の関係性であり、具体的にはたとえば、夫婦の適応（役割期待に対してどの程度応えているか）であったり（小山, 1967）、夫婦関係の近代化・平等化の程度を明らかにすること（都市の家族と村落地域の家族では、また妻が無職の家族と共働き家族では、夫婦関係はどちらが近代的・平等的か）（上子, 1979）であった。したがって、家事を労働としてとらえ、家族の生活にとって不可欠な労働を誰が行ないその経済的報酬は何かといったことを明らかにするという関心は、2次的なものだった。たとえば小山隆らの研究（小山, 1967）では、ブラッドとウルフの研究と同様に、夫が多く行なうであろうと思われる家事（それは必要度からいうと周辺的な家事である）を質問項目に選び、一方炊事などの時間やエネルギーを要し、また家族生活にとってより中心的な家事は、あらかじめ質問項目からはずされていた。

- 5) 家事労働論争については、Gardiner (2000)、Molyneux (1979)などを参照。
- 6) ちなみにオークレーによると、職業労働の研究においても、当時のイギリスでは労働力の4割近くが女であったにもかかわらず、おもに男性に対する調査研究が行なわれ、女はデータからほとんど欠落していた。にもかかわらずそれらの研究には、労働一般あるいは性別を問わない労働者について述べているのだと見せかけるようなタイトルが使われ、このジェンダー・バイアスを見えにくくしていた。
- 7) またオークレーは別の著作において、家庭において家事に専念する存在としての専業主婦は、産業化によって市場向けの生産が家庭から分離し、家庭の外で大規模に組織化されるとともに生まれたことを明らかにした。これによって、家事と女性のつながり、あるいは家内領域と女性のつながりは、生物学的で不変のものではなく、社会・経済・文化的状況によって変化するものであることを示した（Oakley, 1990 [1974] = 1986）
- 8) それまでの主流派の新古典派経済学において、家族（家計）は生産ではなく消費の単位ととらえられていた。そこではたとえば、「価値」「労働」「仕事」「生産」などの経済学の中心概念について、次のように考えられていた（そして、現代でもかなりの程度そうである）。まず「価値」については、市場（そこでは経済主体が自己利益を求めて利己的・合理的に行動するとされる）こそが価値が表現される場所である。したがってたとえば生命の価値は、「人々が安全に対してどれだけ喜んで支払うか」によって表現されることになる。また「労働」や「仕事」は「報酬が支払われる活動」として定義される。したがって、家庭を中心にした労働活動や、親戚・友人・隣人・知人の中でのサービスの提供や授与は、経済学上は「労働」や「仕事」としては認知されない。つまり経済学

家事はどのようにとらえられてきたか？—「公共／家内領域の分離」という社会認識との関連から（大和）

者は「労働」や「仕事」という言葉を、市場での利益を生み出す活動に限って用いている。その結果、そのような利益を生まない活動、つまり報酬を伴わない活動は、「生産」的とはみなされない。したがって、家庭を中心にした労働活動や、親戚・友人・隣人・知人の間でのサービスの提供や授与は、「生産」ではないのである（Waring, 1988=1994）。このように、主流派の経済学における社会観も、「公共領域＝労働・生産、家内領域＝非労働・非生産」という枠組にしたがったものだった。

9) Berk (1985) や Morris (1990) は、ベッカーのモデルで用いられているいくつかの仮定には問題があると論じている。たとえば、①単一の効用という仮定：世帯は効用の最大化を目指して、世帯メンバーの労働を振り分けるという理論においては、世帯における単一の効用が仮定されている。しかし実際には、世帯メンバー間で効用が異なるかもしれないが、この可能性は排除されている。したがってあるメンバーの効用が優先され、他のメンバーの効用は考慮されないという可能性、つまり世帯内における権力関係が存在する可能性も排除されている。②人々の趣味や選好は一定とする仮定：趣味や選好（価格以外で意思決定に影響を及ぼす可能性のあるもの）は、一定であると仮定されている。しかし現実には、選好は多様であり、しかも世帯の意思決定に影響を及ぼす。そうであれば、他の条件が同じでも、選好の違いによって世帯の意思決定は異なることになるが、その可能性は分析から排除されている。③規範的・制度的制約の影響を考慮しないという仮定：世帯内・外におけるメンバーの活動に対する、規範的あるいは制度的な制約（たとえば、性別役割分業規範や、女性の市場労働への参加・男性の家事労働への参加を不利に扱うような制度）はモデルには含まれていない。しかし実際には、これらは世帯メンバーの意思決定に影響を及ぼすし、しかもその影響の仕方はジェンダーによって異なる。先に述べた、男女によって異なる人的資本への投資のパターンも、規範的・制度的な制約に影響されていると考えられるが、この点はベッカーのモデルでは考慮されておらず、むしろ生物学的な説明に還元されている。

10) 時代が下るにつれ、下級専門職や事務員なども中産階級に含められるようになったが、これらの人々は下層中産階級（lower middle class）と呼ばれた。イギリスにおける中産階級の多様性については、新井（2001）を参照。

11) この点に関連して、エスニック・マイノリティのフェミニストは、女性の抑圧を理解する際に、加法モデル（つまり、白人女性は〈ジェンダー〉による抑圧、エスニック・マイノリティ女性は〈ジェンダー＋エスニシティ〉による抑圧、というモデル）によって理解することを批判している。このモデルによると、白人女性がエスニック・マイノ

リティ女性を、エスニシティを基礎にして抑圧しているという、女性の間での抑圧・被抑圧という構造が見えにくい。しかし実際には、家事使用人と女主人との関係に明らかのように、白人女性はエスニック・マイノリティの女性の労働から利益を得ており、女性どうしの間での抑圧・非抑圧関係も存在する。したがって単純な加法モデルではなく、ジェンダー関係とエスニシティ関係の絡み合いをとらえるモデルが必要だと主張している (Glenn, 1985)。これに、階級の視点をも加えるならば、ジェンダー、エスニシティ、階級という少なくともこの3要素の絡み合いをとらえる必要がある。

【参考文献】

- 新井潤美, 2001, 『階級にとりつかれた人びと—英国ミドル・クラスの生活と意見』中央公論新社。
- Bales, Robert F. and Slater, Philip E., 1955, "Role Differentiation in Small Decision-Making Groups," Parsons, Talcott and Bales, Robert F. (eds.), *Family: Socialization and Interaction Process*, Glencoe, Illinois: The Free Press, 259-306. (=1981「小規模の意思決定集団における役割分化」, 橋爪貞雄・溝口謙三・高木正太郎・武藤孝典・山村賢明訳『家族』黎明書房, 108-169.)
- Banks, Joseph Ambrose, 1954, *Prosperity and Parenthood: A Study of Family Planning among the Victorian Middle Classes*, London: Routledge and Kegan Paul.
- Barrett, Michell, 1985, "Introduction," Engels, Friedrich, *The Origin of the Family, Private Property and the State*, Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 7-30.
- Becker, Gary S., 1965, "A Theory of the Allocation of Time," *Economic Journal*, 75, 493-517.
- Becker, Gary S., 1993 [1981], *A Treatise on the Family* (enlarged edition), Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
- Beechey, Veronica, 1987, *Unequal Work*, London: Verso. (=1993, 高島道枝・安川悦子訳『現代フェミニズムと労働』中央大学出版部.)
- Benston, Margaret, 1997 [1969], "The Political Economy of Women's Liberation," Hennessy, Rosemary and Ingraham, Chrys (eds.), *Materialist Feminism: A Reader in Class, Difference, and Women's Lives*, London: Routledge, 17-23. (First appeared in *Monthly Review*, 21(4), September 1969.)
- Berk, Sarah Fenstermaker, 1985, *The Gender Factory: The Apportionment of Work in American Households*, New York and London: Plenum Press.
- Blood, Robert O. Jr. and Wolfe, Donald M., 1960, *Hubands and Wives: Dynamics of Married Living*, New York: The Free Press of Glencoe.
- Carby, Hazel V., 1997 [1982], "White Women Listen! Black Feminism and the Boundaries of Sisterhood," Hennessy, Rosemary and Ingraham, Chrys (eds.), *Materialist Feminism: A Reader in Class, Difference, and Women's Lives*, London: Routledge, 110-128.
- Chodorow, Nancy, 1978, *The Reproduction of Mothering*, London: University California Press. (=1981, 大塚光子・大内管子訳『母親業の再生産』新曜社.)
- Craib, Ian, 1997, *Classical Social Theory: An Introduction to the Thought of Marx, Weber, Durkheim, and Simmel*, Oxford: Oxford University Press.

家事はどのようにとらえられてきたか？—「公共／家内領域の分離」という社会認識との関連から（大和）

- Dalla Costa, Mriarosa and James, Selma, 1997 [1972], "Women and the Subversion of the Community," Hennessy, Rosemary and Ingraham, Chrys (eds.), *Materialist Feminism: A Reader in Class, Difference, and Women's Lives*, London: Routledge, 40-53.
- Davidoff, Leonare, 1995, "Regarding Some 'Old Husbands' Tales': Public and Private in Feminist History," *Worlds Between: Historical Perspectives on Gender and Class*, Cambridge: Polity Press, 227-276.
- Davidoff, Leonare, 1995 [1974], "Mastered for Life: Servant and Wife in Victorian and Edwardian England," *Worlds Between: Historical Perspectives on Gender and Class*, Cambridge: Polity Press, 18-40.
- Davidoff, Leonare (with Jeanne L'Esperence and Howard Newby), 1995 [1976]a, "Landscape with Figures: Home and Community in English Society," *Worlds Between: Historical Perspectives on Gender and Class*, Cambridge: Polity Press, 41-72.
- Davidoff, Leonare, 1995 [1976]b, "The Rationalization of Housework," *Worlds Between: Historical Perspectives on Gender and Class*, Cambridge: Polity Press, 73-102.
- Davidoff, Leonare, 1995 [1979], "Class and Gender in Victorian England: The Case of Hannah Cullwick and A. J. Munby," *Worlds Between: Historical Perspectives on Gender and Class*, Cambridge: Polity Press, 103-150.
- Davidoff, Leonore, Megan Doolittle, Janet Fink, and Katherine Holden, 1999a, "The Family and the Historian," *The Family Story: Blood, Contract and Intimacy, 1830-1960 (Women and Men in History)*, Harlow: Longman, 16-50.
- Davidoff, Leonore, Megan Doolittle, Janet Fink, and Katherine Holden, 1999b, "Fathers and Fatherhood: Family Authority," *The Family Story: Blood, Contract and Intimacy, 1830-1960 (Women and Men in History)*, Harlow: Longman, 135-157.
- Davidoff, Leonore, Megan Doolittle, Janet Fink, and Katherine Holden, 1999c, "Domestic Service and Lodging: Doing Family Work," *The Family Story: Blood, Contract and Intimacy, 1830-1960 (Women and Men in History)*, Harlow: Longman, 158-182.
- Davidoff, Leonare and Hall, Catherine, 1994 [1987], *Family Fortunes: Men and Women of the English Middle Class 1780-1850*, London: Routledge.
- Davidson, Caroline, 1982, *A Woman's Work Is Never Done: A History of Housework in the British Isles 1650-1950*, London: Chatto and Windus.
- Durkheim, Émile, 1960 [1893], *De la Division du Travail Social: Étude sur L'organisation des Sociétés Supérieures* (7e ed.), Paris: P. U. F. (=1971, 田原音和訳『社会分業論』青木書店.)
- Engels, Friedrich, 1985, *The Origins of the Family, Private Property and the State*, Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books. (=1965, 戸原四郎訳『家族・私有財産・国家の起源—ルイス・H・モーガンの研究に関連して』岩波書店.)
- Fraser, Nancy, 1997, *Justice Interruptus: Critical Reflections on the "Postsocialist" Condition*, New York and London: Routledge.
- Friedan, Betty, 1963, *The Feminine Mystique*, London: Gollancz. (=1977, 三浦富美子訳『増補 新しい女性の創造』大和書房.)
- Gardiner, Jean, 2000, "Domestic Labor Revisited: A Feminist Critique of Marxist Economics," Himmelweit, Susan (ed.), *Inside the Household: From Labour to Care*, London: Macmillan,

80-101.

- Gavron, Hannah, 1966, *The Captive Wife: Conflicts of Housebound Mothers (International Library of Sociology and Social Reconstruction, vol. 59)*, London: Routledge and Kegan Paul. (=1970, 尾上孝子訳『妻は囚われているか—家庭に縛られた母たちの矛盾』岩波書店.)
- Geib-Gunderson, Lisa, 1998, *Uncovering the Hidden Work of Women in Family Businesses : A History of Census Underenumeration*, New York : Garland Publishing.
- Glenn, Evelyn Nakano, 1985, "Racial Ethnic Women's Labor: The Intersection of Race, Gender and Class Oppression," *Review of Radical Political Economics*, 17(3), 86-108.
- Glenn, Evelyn Nakano, 1992, "From Servitude to Service Work : Historical Continuities in the Racial Division of Paid Reproductive Labor", *Signs*, 18(1), 1-43.
- Glucksmann, Miriam A., 1990, *Women Assemble: Women Workers and the New Industries in Inter-War Britain*, London: Routledge.
- Glucksmann, Miriam A, 1995a, "Some Do, Some Don't (But in Fact They All Do Really); Some Will, Some Won't; Some Have, Some Haven't: Women, Men, Work, and Washing Machines in Inter-War Britain", *Gender and History*, 7(2) (August), 275-294.
- Glucksmann, Miriam A., 1995b, "Why 'Work'? : Gender and the 'Total Social Organization of Labour'," *Gender, Work and Organization*, 2(2) (April), 63-75.
- Goffman, Erving, 1979, *Gender Advertisements*, New York: Harper and Row.
- Graham, Hilary, 1983, "Caring: A Labour of Love," Finch, Janet and Groves, Dulcie (eds.), *A Labour of Love: Women, Work and Caring*, London: Routledge and Kegan Paul.
- Graham, Hilary, 1991, "The Concept of Caring in Feminist Research: The Case of Domestic Service," *Sociology*, 25(1), 61-78.
- Gregson, Nicky and Lowe, Michelle, 1994, *Servicing the Middle Classes: Class, Gender and Waged Domestic Labour in Contemporary Britain*, London: Routledge.
- Grint, Kieth, 1997 [1992], *The Sociology of Work : An Introduction* (second edition), Cambridge : Polity Press.
- Habermas, Jürgen, 1990 [1962], *Strukturwandel der Öffentlichkeit : Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*, Luchterhand : Neuwied. (=1994, 細谷貞雄・山田正行訳『公共性の構造転換—市民社会の一カテゴリーについての探求』(第2版) 未来社.)
- Hall, Catherine, 1992 [1980], "The History of Housewife," *White, Male and Middle Class : Explorations in Feminism and History*, Cambridge: Polity Press, 43-71.
- Hall, Catherine, 1992 [1982], "The Butcher, the Baker, the Candlestick-maker: The Shop and the Family in the Industrial Revolution," *White, Male and Middle Class: Explorations in Feminism and History*, Cambridge: Polity Press, 108-123.
- Hall, Catherine, 1992 [1985], "Private Persons versus Public Someones : Class, Gender and Politics in England 1780-1850," *White, Male and Middle Class : Explorations in Feminism and History*, Cambridge: Polity Press, 151-171.
- Hall, Catherine, 1992 [1986], "The Tale of Samuel and Jemima : Gender and Working-class Culture in Early-nineteenth Century England," *White, Male and Middle Class: Explorations in Feminism and History*, Cambridge: Polity Press, 124-150.
- Hall, Catherine, 1994, "Rethinking Imperial Histories : the Reform Act of 1867," *New Left*

家事はどのようにとらえられてきたか？—「公共／家内領域の分離」という社会認識との関連から（大和）

- Review, 208, 3-29.
- Harrison, John, 1973, "The Political Economy of Housework," *Bulletin of the Conference of Socialist Economists*, Winter, 35-52.
- Hartman, Heidi, 1981, "The Unhappy Marriage of Marxism and Feminism: Towards a More Progressive Union," Sargent Lydia (ed.), *Women and Revolution: A Discussion of the Unhappy Marriage of Marxism and Feminism*, London: Pluto Press, 1-41. (=1991, 「マルクス主義とフェミニズムの不幸な結婚」, 田中かず子訳『マルクス主義とフェミニズムの不幸な結婚』勁草書房, 31-80.)
- Higgs, Edward, 1986, "Domestic Service and Household Production," John, Angela V. (ed.) *Unequal Opportunities*, Oxford: Blackwell.
- Higgs, Edward, 1987, "Women, Occupations and Work in the Nineteenth Century Census," *History Workshop: A Journal of Socialist and Feminist Historians*, 23 (Spring), 59-80.
- Himmelweit, Susan, 2000, "The Discovery of 'Unpaid Work': The Social Consequences of the Expansion of 'Work'," Himmelweit, Susan (ed.), *Inside the Household: From Labour to Care*, Houndmills and London: Macmillan, 102-119.
- Hochschild, Arlie Russell, 1983, *The Managed Heart: Commercialization of Human Feeling*, London: University of California Press. (=2000, 石川准・室伏亜希訳『管理される心—感情が商品になるとき』世界思想社.)
- Horn, Pamela, 1997 [1975], *The Rise and Fall of the Victorian Servant*, Phenix Mill·Stroud·Gloucestershire: Sutton Publishing.
- James, Selma, 1997 [1972], "Introduction to The Power of Women and the Subversion of the Community," Hennessy, Rosemary and Ingraham, Chrys (eds.), *Materialist Feminism: A Reader in Class, Difference, and Women's Lives*, London: Routledge, 33-39.
- 上子武次, 1979, 『家族役割の研究』ミネルヴァ書房.
- 河村貞枝, 1982, 「ヴィクトリア時代の家事使用人」, 角山榮・川北稔編『路地裏の大英帝国』平凡社, 147-168.
- 小山隆編, 1967, 『現代家族の役割構造—夫婦・親子の期待と現実』培風館.
- Marx, Karl and Engels, Friedrich, 1962, *Karl Marx - Friedrich Engels Werke, Band 23, Das Kapital, Kritik der politischen Ökonomie, Erster Band, Buch I: Der Produktionsprozeß des Kapitals*, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Berlin: Dietz Verlag. (=1982, マルクス＝エンゲルス全集刊行委員会訳「第1部 資本の生産過程」『資本論 全』大月書店.)
- McBride, Theresa M., 1976, *The Domestic Revolution: The Modernisation of Household Service 1820-1920*, London: Croom Helm.
- McClelland, Keith, 1998, "Masculinity and the 'Representative Artisan' in Britain 1850-80," Roper, Michael and Tosh, John (eds.), *Manful Assertions: Masculinities in Britain since 1800*, London and New York: Routledge, 74-91.
- McClintock, Anne, 1995, *Imperial Leather: Race, Gender and Sexuality in the Colonial Contest*, London: Routledge.
- McDowell, Linda and Pringle, Rosemary, 1992a, "Defining Public and Private Issues," McDowell, Linda and Pringle, Rosemary (eds.), *Defining Women*, Cambridge: Polity Press: 9-17.
- McDowell, Linda and Pringle, Rosemary, 1992b, "Defining Work," McDowell, Linda and

- Pringle, Rosemary (eds.), *Defining Women*, Cambridge: Polity Press: 122-131.
- Molyneux, Maxine, 1979, "Beyond the Domestic Labour Debate," *New Left Review*, 116, 3-27.
- Morris, Lydia D., 1990, *The Workings of the Household*, Oxford: Polity Press.
- Oakley, Ann, 1974, *The Sociology of Housework*, Oxford: Basil Blackwell. (=1993, 佐藤和枝・渡辺潤訳『家事の社会学』松籟社.)
- Oakley, Ann, 1990 [1974], *Housewife*, Harmondworth: Penguin Books. (=1986, 岡島茅花訳『主婦の誕生』三省堂.)
- Parsons, Talcott, 1954 [1949], "The Kinship System of the Contemporary United States," *Essays in Sociological Theory*, New York: Free Press, 177-196.
- Parsons, Talcott, 1956, "The American Family: Its Relations to Personality and to the Social Structure", Parsons, Talcott and Bales, Robert F. (eds.), *Family: Socialization and Interaction Process*, London: Routledge and Kegan Paul, 3-33. (=1981, 「アメリカの家族—パーソナリティおよび社会構造に対するその関連」, 橋爪貞雄・溝口謙三・高木正太郎・武藤孝典・山村賢明訳『家族』黎明書房, 16-59.)
- Romero, Mary, 1997, "Who Takes Care of the Maid's Children? : Exploring the Costs of Domestic Service," Nelson, Hilde Lindemann (ed.), *Feminism and Families*, New York and London: Routledge, 151-169.
- Secombe, Wally, 1974, "The Housewife and Her Labour under Capitalism," *New Left Review*, 83 (January-February), 3-24.
- Sharpe, Sue, 1972, "The Role of the Family in the Oppression of Women," *New Edinburgh Review*.
- Stacy, Margaret, 1981, "The Division of Labour Revisited or Overcoming the Two Adams," Abrams, Philip, Rosemary Deem, Janet Finch, and Paul Rock (eds.), *Practice and Progress: British Sociology 1950-1980*, London: George Allen and Unwin, 172-204.
- 塩沢由典, 1995, 「働く場の変容と再設計—情報化は在宅勤務を可能にするか」, 井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編『岩波講座現代社会学 第20巻 仕事と遊びの社会学』岩波書店, 97-114.
- Tong, Rosemarie, 1995 [1989], *Feminist Thought: A Comprehensive Introduction*, London: Routledge.
- Tosh, John, 1998, "Domesticity and Manliness in the Victorian Middle Class: The Family of Edward White Benson," Roper, Michael and Tosh, John (eds.), *Manful Assertions: Masculinities in Britain since 1800*, London and New York: Routledge, 44-73.
- Vroom, Victor H., 1964, *Work and Motivation*, New York: John Wiley.
- Waring, Marilyn, 1988, *If Women Counted: A New Feminist Economics*, San Francisco: Harper and Row. (=1994, 篠塚英子訳『新フェミニスト経済学』東洋経済新報社.)
- Weber, Max, 1920, *Die protestantische Ethik und der *Geist* des Kapitalismus*, *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, Bd. 1, SS. 17-206. (=1989, 大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店.)
- Weber, Max, 1967, (濱島朗訳)『権力と支配—政治社会学入門』有斐閣. (=Weber, Max, 1947, *Wirtschaft und Gesellschaft, Grundriss der Sozialökonomik*, III, Tübingen: Abteilung, J. C. B. Mohr.等の抄訳.)
- Welter, Barbara, 1966, "The Cult of True Womanhood: 1820-1860," *American Quarterly* (Sum-

家事はどのようにとらえられてきたか？—「公共／家内領域の分離」という社会認識との関連から（大和）

mer), 151-174. (=1986, 立原宏要訳「女は“女らしく”というモラルがつくられた」, カー
ル・N・デグラーほか『アメリカのおんなたち—愛と性と家族の歴史』教育社, 55-92.)

West, Candace and Zimmerman, Don H., 1987, “Doing Gender,” *Gender and Society*, 1, 125-
151.

Yamato, Reiko, 1998, “What Insights Does the Existence of Domestic Servants Provide into the
Questions of the Construction of Identities in Relation to Class, Gender, and ‘Race’ ?” (an
essay submitted to the course of “Articulations of Power: ‘Difference’ in the Mid-Victorian
World” in the Department of Sociology, the University of Essex, the UK.)

— 2001.11.8 受稿 —